

哲学研究

第五百四十号

第四十六
卷第十册

現実活動態(下)

——アリストテレスにおけるキーネーシス(あるいは運動の論理)と
エネルギーア(あるいは活動の論理)との対置について——

藤澤令夫

七 J・L・アクリルの解釈

前章(前号)の最後に述べたような意図のもとに、必要な範囲内でアクリルの論点を一覽し、それらの論点に対するわれわれの態度決定を行なうことにしよう。

(1) 前章においてすでに見たように、G・ライルは、「見ると同時に見てしまう」というアリストテレスの言葉について、「見る」は *terminus* を告げる動詞(*got-it verb*)の一つであって、時間を通じて進行するような事柄を示すものではない、というように解釈した。これに対してアクリルは、次のように反論する。

アリストテレスは、エネルギーアの場合は現在が同時に完了であることを論じるにあたって、「もしそうでないとしたら、それは「キーネーシスの場合と同じように」いつかは終止しなければならないであろう」と言っている(『形而

上学』の卷六章(1048b26)。この言い方は明らかに、アリストテレスの念頭にあるのが、時間を通じて進行する行為とそうでない行為との区別ではなくて、進行そのものに限りをもつような性格の行為と、そうでない性格の行為との区別があるいは、必ず或る時に終止しなければならぬ行為と、必ずしも終止する必要のない行為との対比であることを告げている。それにまた、「見る」の場合がたとえどうであっても、少なくともエネルゲイアの例のいくつか、「思惟する」「観想する」「生きる」「幸福である」等は、ライルの言うような *got-it verb* ではなく、時間を通じて進行するものを示していることは明白である。

このようにして、「時間を通じて進行しえない」ということは、エネルゲイアについてのアリストテレスの考えの中にないし、またアリストテレスの挙げるエネルゲイア動詞はライルの言う *got-it verb* に対応するものではないと、アクリルは結論する。^{*}

* *op. cit.*, pp. 125~126. (主要点のみ)

(2) それでは、現在が同時に完了でもあるというアリストテレスの論点(テンス・テスト)を、どのように解すべきか。

或る人が *t* という時点で *X* という行為を始めるとする。*t* 時点においては、「彼は *X* しつつある」(*he is Xing*)とは言えない。それが言えるのは、*t* より後の或る時点 *w* においてであり、そして、*t* から *w* までの期間がどれほど短くても、*w* において「*X* しつつある」と言えるときにはまた、「*X* しつつあった」(*he has been Xing*)とも言える。こゝまでは、エネルゲイアの場合もキーネーシスの場合も同様である。

しかし、キーネーシス——例えば「家を建てて」——の場合は、*w* 時点において「家を建てつつある」と言えるならば、*t* 時点から *w* 時点までに「家を建てつつあった」とは言えるけれども、しかし明らかに、同じその期間におい

て「家を建ててしまった」(he has built a house)とは言えない。

他方これに対して、エネルゲイア——例えば「彫像を見つめる」——の場合は、w 時点において「見つめつつある」とすれば、t から w までのあいだに「見つめつつあった」と言えるだけでなく、「見つめてしまった」(he has gazed at the statue)ということも言える。そのあいだに彼がしたことに着目すれば、「見つめてしまった」と言うほかはないからである。

このようにして、「Xしつつある」(he is Xing)と言える時点において「Xしつつあった」(he has been Xing)とも言えるという点は、エネルゲイアの場合もキーネーシスの場合も共通であるが、しかし、同じ時点においてさらに「Xしてしまった」(he has Xed)とも言えるのは、エネルゲイアの場合に限られることであって、キーネーシスの場合には不可能である。——「見ていると同時に見ってしまった」etc. という、エネルゲイアについてのアリストテレスの言葉を、アクリルはこのように解釈する。

見られるようにアクリルのこの解釈は、「Xしてしまった」と言えるかどうかということを、もっぱら、Xを始めから現在に至るまでのあいだ——つまり、「Xしつつあった」ということが言える過去の時間帯——に着目して考える点に、その顕著な特色があるといえる。この解釈によれば、エネルゲイアの完了性(完全性にも通じる)ということとは、t から w までという、現在時点に先行する一定の長さの時間帯がなければ成立しえない——例えば t 時点そのものにおいては成立しえない——わけであるから、およそいかなる意味においても「時間の内にない」(時間を通じて進行するものではない)というようなことは、アクリルの先の主張のとおり、ありえないことになる*。

* 以上 *op. cit.*, pp. 127~128. Cf. (esp.) "The perfect can always be used of the period preceding a moment at which the present can be used" (Italics mine).

(3) しかしながら、『ニコマコス倫理学』Ⅹ巻四章では、「見る」と同類である「快樂」(楽しむ)が「キーネシスではない」ことの理由として、「なぜなら、キーネシスはすべて時間の内にあり、また或るひとつの目的をめざすものだからである(例えば建築がそうである)」(1174a19)と語られていた。このアリストテレスの言い方は、アクリルの主張に反して、キーネシスとまさにこの点で対比されている快樂(エネルギー)が、「時間の内にない」ことを含意しているのではないか。

この点についてアクリルは、右の言葉(εἰς χρόνον……εἰς τέλους χρόνος)の中の「時間の内にある」だけを切り離して単独にキーネシスの特質と解することに反対し、「時間の内にある」(εἰς χρόνον)ことと「或るひとつの目的をめざす」(τέλους χρόνος)ことが一体となって、キーネシスであることの単一の基準を与えるものである、と主張する。すなわち、キーネシスは無条件的に「時間の内にある」と言われているのではなく、ひとつの目的によって限定された一定の時間を占める、と言われているのである。したがってまた、これと対比されるエネルギーも、無条件的に時間の内にないというのではなく、キーネシスの場合のような定まった時間の内にない、というだけである。——このように解釈することによって、アクリルはこの関門を切り抜ける。

だが、第二の難関が待っている。同じ章の少しあとでアリストテレスは、今度はもつとはつきりと、「このこと」(キーネシスと快樂とが異なること)はまた、動くということ(キーネイスタイ)は時間の内においてでなければありえないのに対して、楽しむことの場合にはそれが可能である「時間の内においてでなく起りうる——*ἡσθεὶς δὲ (sc. ἐνέργειαν ἔχει ἐν χρόνῳ)*」という事実からも、考えられると「*ὅτι οὐκ ἔστιν ἐν χρόνῳ*」(1174b7~9)と述べている。この発言を前にして、さすがにアクリルも困惑を告白するが、「I am not quite clear what to say about this」(しかしし氣を取り直して次のように論じる。

——或る行為が時間の内においてでなくありうるという条件は、その行為がキーネシスではないことを示すけれ

ども、積極的にエネルギーであることを示すものではない。なぜなら、キーネーシスの始めと終りそのものは、いかなる時間のあいだも続かないという意味において、時間の内にはないけれども、しかしそれ自身がエネルギーではないからである。このように、この条件を充たしても、必ずしもそれがエネルギーであるとはかぎらない。

アリストテレスは、ここではたんに、若干のエネルギー動詞を非持続的行為の表示に用いる可能性を認めて、その点をキーネーシス動詞に対するもう一つの対比点として補足的に挙げていただけであって、けっしてそれをエネルギーであることの必要条件とも充分条件とも考えているわけではない。エネルギーであるための必要にして充分な条件は依然として、先に見られた「Xしつとあると同時にXしてしまった」と言えるということなのである。——このように解釈することによって、アクリルはどうかこの第二の難関を突破した（と彼は考えるが、しかし今度はかなり疑わしい）*。

* *Et op. cit.*, pp. 130~131.

(4) さて、これまでのところアクリルは、かなり無理をしながらも、とにかくアリストテレスの言っているエネルギーとキーネーシスとの区別を生かすための解釈につとめてきた。しかしここでアクリルは、この区別それ自体がアリストテレスの言うような意味において、はたして成立しうるかどうかという、重大な疑義を表明する。

エネルギー型の行為・行動とキーネーシス型のそれとが区別されるのは、「しつとある」と言えるときに「してしまった」とも言える（エネルギー）か、それとも言えない（キーネーシス）か、という点においてであった（そしてこのことをアクリルは、先に(2)で見られたように、現在時点に先行する期間との関連において解釈した）。

しかしそれならば（とアクリルは言う）、アリストテレスがキーネーシスの例とする「歩く」は、このエネルギーであるための基準を充たすのではないか。t時点で歩き始めた人は、その後w時点において「歩きつとある」と言

えるとともに、(t時点からw時点までのあいだ)「歩いてしまった」とも言えるからである。「してしまった」とは言えないというキーネーシスの基準は、先に見た「建築する」(家を建てる)には当てはまるが、「歩く」にはうまく当てはまらないだろう(アクリルはこう言うが、しかしこの意味でならば、建築の場合でも、t時点からw時点のあいだの分だけ「建築してしまった」、その分だけ「家を建ててしまった」と言えるはずであろう)。

アリストテレスはおそらくこの点に気づいていて、『ニコマコス倫理学』K巻四章では、「歩く」を含めたキーネーシスについて、 \langle どこからどこまで \rangle (for where to) ということがその形相を規定すると述べている。たしかに、この条件——例えば「A地点からZ地点まで」——が加わるならば、「A地点からZ地点まで歩きつつある」と言えるときに、「A地点からZ地点まで歩いてしまった」とは言えないし、「A地点からZ地点まで歩くこと」の「形相」は、Z地点に到達するまでのどの時点においても、未完成であるといわなければならない。

しかしそれならば(とアクリルは論じる)、アリストテレスが同じ箇所でキーネーシスとその点で区別・対比させている「楽しむ」(快樂)についても、まったく同じことが当てはまる。楽しむことはつねに必ず何かを楽しむことであるから、「歩く」の場合に「AからZまで」を加えたのと同じように、「楽しむ」の場合にも、例えば「或る交響曲を(聞くことを)楽しむ」というように、目的語を加えて考えなければならない(この目的語は、もちろん、「A地点からZ地点まで」とパラレルに、「その交響曲の最初から最後までを」という意味でなければならない)。すると、(例えば)「私は第九交響曲を楽しみつつある」と言えるときに、「私は第九交響曲(の最初から最後まで)を楽しんでしまった」とは言えないことになる。「私はA地点からZ地点まで歩いてしまった」という完了形と同じように、「私は第九交響曲(の最初から最後まで)を楽しんでしまった」という完了形(「形相」の完成)は、けっしてアリストテレスの言うように「いかなる時点においても」言えることではない。私がかもし演奏の途中で呼び出されたとしたら、それまでに第九交響曲を楽しんでしまったと言うことはできない。それは、演奏者たちが演奏を中断させられた場合、演奏してしまつたと

言えないのと同様である。

このようにして、「歩く」がキーネーシスであってエネルギーではないことを示そうとするアリストテレスの手続き——どこからどこまでくを加えて正確に記述すること——は、「楽しむ」もまた同じようにキーネーシスであってエネルギーではないことを示す結果になるであろう。一方、このどこからどこまでくに相当する目的語を加えなければ、「歩く」も「楽しむ」も共にエネルギーの基準を充たすことは、先に見られたとおりである。このことは、結局、「歩く」とか「楽しむ」とかいったことそれ自体を頭から固定的に、キーネーシスあるいはエネルギーとして部類分けするのが無理であることを示すものである*。

* 以上 *op. cit.*, pp. 131~132.——同じでアクリルは、Z・ヴェンドラー (Zeno Vendler, *Verbs and Times, The Philosophical Review* vol. 66, 1957, pp. 143 sqq.) がアリストテレスと無関係に行なった 'activity terms' と 'accomplishing terms' との区別を援用する (*op. cit.*, pp. 135~136)。ヴェンドラーの 'activity terms' の例は「走る」「荷車を押す」など、'accomplishing terms' の例は「一マイル走る」「円を描く」などであって、後者は前者と違って、「一マイルを走り終え、円を引き終えるまでは成立しない (未完成である)」。この区別の内容は、アリストテレスのエネルギーとキーネーシスとの区別に対応するものであるが、「走る」と「一マイル走る」といった例が示すように、或る動詞 (「走る」「歩く」など) それ自体をどちらかに割り切つて分類する (アリストテレスがしたように) のは不当である、とアクリルは論じる。

なおアクリルは、「速い」「遅い」が言えるかどうかという基準 (『ニコマコス倫理学』K巻三章) については、これがアリストテレスにとって、問題の区別の真の根拠であるとはいえないとみなす (p. 136)。アリストテレスはこの基準を他の箇所では使っていないし、この箇所でも一般的な仕方では述べられているわけではないからである。

(5) さて、われわれもまた先に、アクリルの言うこの 'blanket classification' に対する疑問を述べたが (本稿第六章)、それは一つには、或る行為の目的がその行為自身の内に内在するかどうか、あるいは、その行為自体がそのま

ま端的に目的にほかならないかどうかという、エネルギーアとキーネーシスを区別するもうひとつの基準に関連してであった。〈目的〉に関するこのアリストテレスの論点をアクリルがどのように扱っているかを、最後に見届けておきたい。簡単に、というのは、アクリルのこの点に関する論述そのものがきわめて簡単だからである。

すなわちアクリルは、アリストテレスが〈目的〉に関するこのひとつの価値論的な観点からエネルギーアとキーネーシスとを区別した、それが区別の主要な観点であった、という想定を受け入れるのは、他にもそのことを告げる明確な証拠がないかぎり、速断で危険であるとみなす。或る行為がエネルギーアであるかキーネーシスであるかという間と、他方、人がその行為をそれ自体のために為すかどうかという間とのあいだには、論理的な、あるいは心理的なあるいは倫理的な関連があるかもしれない。しかしアリストテレスは、けっして前者の間への答を見出すための途として、後者の間に答えるべきだと提唱しているとは思えない。

このようにアクリルは、「目的」に関するこの価値論的観点をアリストテレスの区別にとって副次的なものであったと判定する*。

* *op. cit.*, pp. 137~138.

八 アクリル批判

前章において、アクリルの解釈と論評の主要論点を必要な範囲内で、(1)から(5)にわたって一通り見た。これらをさらに集約すれば、次の三点にまとめて示すことができる。

(A) いわゆるテンス・テストについての独得の解釈。アリストテレスが提示した「しつつかある」と同時に「してしまった」と言えるかどうかということ、エネルギーアとキーネーシスとを区別する最も主要な——ほとんど唯一

の——基準とみなしつつ、これを、現在時点に先行した時間帯に関連させて解釈する。この解釈は、エネルゲイア型の行為もまた「時間の内にある」(時間を通じて進行する)ということ自体においては、キーネーシスと同様であるという見解と表裏一体をなし、また次の(B)の論点の基盤ともなっている。「第七章の(1)(2)(3)」

(B) アリストテレスがキーネーシスの例として挙げる「歩く」と、エネルゲイアの例とみなされる「楽しむ」とのバラレル性の指摘。「歩く」も「楽しむ」もそのままでは共に、「しつつある」と同時に「してしまつた」と言えるというエネルゲイアの基準を充たす。またもしアリストテレスの言うように、「歩く」のほうにへどこからどこまでを指示限定句をつけるべきだとすれば、同じ手続きによって「楽しむ」もまた「歩く」と同じく、キーネーシスであることになるかと判定される。このことは一般に、こうした「歩く」や「楽しむ」その他を、頭からエネルゲイアとキーネーシスのどちらかに割り振ることの不当性を告げる。「第七章の(4)」

(C) 或る行為がその行為自体を目的として為されるかどうか、という価値論的な観点からの基準は、アリストテレスにとって、エネルゲイアとキーネーシスとを区別するための主導的な基準ではなく、副次的なものでしかありえない。「第七章の(5)」

——先にあらかじめ述べたように(第六章末)、もしアクリルのこれらの解釈が正しければ、アリストテレスのエネルゲイア思想に内包されているとわれわれが見た哲学的意義(第四、五章)は、すべて崩壊することはあまりにも明らかであろう。エネルゲイア概念は、右の(A)によれば、「時間を超えた永遠性」への指向というようなこととは、およそまったく関係がないことになるし、また(B)によって、対立概念であるはずのキーネーシスとの区別の根拠自体が危うくなり、そして(C)によって、人間の生き方や行為のあり方における指導理念としての意義が、まったく稀薄になってしまうからである。われわれ自身がいだいた素朴な疑問(第六章)も、このアクリルの解釈と論評の中に組みこまれて、ひとつの仕方徹底化されて現われているといえる。エネルゲイア思想に期待された哲学的

意義の行方を見定めるためには、われわれとしては、アクリルが提起したこれら(A)(B)(C)の論点の当否を確認した上でなければ、いずれにせよ先へ進むことができないであろう。

そこでまず、(C)の論点から吟味することにする。というのは、アクリル論文全体の中では、〈目的〉に関する観点は副次的なものにすぎないというこの論点の扱いそのものが、副次的で簡単なものでしかないけれども、しかし事の内容は、アクリルの解釈がもつ全般的な性格とも本質的に関わり合っていると思われるからである。

もう一度、先に示した主要テキスト(本稿第三章)をふり返ってみよう。そして、アリストテレスが『形而上学』
 〇卷六章において、問題のエネルギーとキネーシスとの区別を、そもそもどのような言葉で語り起しているかをよく見てみよう。——「限りを有するような諸行為のうちのかなるものも、『それ自身が』目的ではなく、目的と相関的であるような事柄に属する」と彼は始める。そのような「行為」は、「目的がまだ得られていない状態で動きの中にある」から、少なくとも不完全な(トレイアー)行為であるとはいえない。それ自身がテロス(目的)でないものは、トレイアー(完全)でありえないからである。真に「行為」の名に値する完全な行為とは、「目的がその内に内在している」ような行為である。——

まぎれもなくアリストテレスは、或る行為がそれ自身を目的として為されるものであるかどうかという観点を提示することから出発し、彼が少しあとでそれぞれエネルギーとキネーシスと呼ぶ行為の二つの型を、まさにこの観点を基準として区別することから始めている。そして、それに続いて、ほかならぬこの〈目的〉に関する観点からの区別のひとつの例証(例として、一方の行為はつねに現在がそのまま完了であるのに対して、他方は現在と完了とが乖離する、という事実を挙げているのである。そこに列挙されている動詞の現在完了形のすべては、したがって、その前に提示された目的実現の意味での完全性ということの、ひとつの徴表として語られているものにほかならない。この箇所におけるアリストテレスの論述全体を支配している主導的な観点は、疑いもなく、〈目的〉に関するそれで

あるといわなければならない。

* 同じく、「歩きつつあると同時に歩いてしまったとはいえないからである」ということが、「キーネシスが不完全である」ということの説明 (*τέλεος*) として語られている (1048b30 sq.)。

もうひとつの主要テキスト『ニコマコス倫理学』K巻四章において強調されている、「見る」や「楽しむ」がつかないかなるときにも完全(テレイアー)であるということ——つねにそれ自身の形相を完成させて(テレイウーン)いるということ——の意味内容も、この『形而上学』の箇所で語られた完全性のそれとまったく同じである。「建築する」その他のキーネシスがこれと対比的に不完全(アテレース)であるとされるのは、キーネシスはすべて「或るひとつの目的をめざすもの」だからであり、したがってその目標に到達するまでは、テロス(目的)未実現の——すなわち、アテレース(不完全)な——状態に終始するからにはかならない。ここで言われるキーネシスが「或るひとつの目的をめざす」(*τέλους εἰς*) ということは、『形而上学』の箇所の最初に言われている「目的と相關的」(*τέλεος ἐν ἑαυτοῖς*) ということと正確に対応し、いずれも、〈目的〉がその行動の内になく(行動自身が目的ではなく)外にあることを述べている。

主要テキストにおけるすべてこのような歴然たる事実にもかかわらず、どうしてアクリルが、一方におけるエネルゲイアとキーネシスの区別と、他方における〈目的〉の観点からみた行為の区別との間には何らかの関係があるかもしれない、(there may be) けれども、しかし前者の〈目的〉に関する観点はアリストテレスにとって決して、エネルゲイアとキーネシスとの区別において主導的な基準をなすとは思えない、というようなことを言いたのか、まったく理解に苦しむところである。アクリルが最も主要な——ほとんど唯一の——区別の基準とみなしたところの、現在が同時に完了でもあるかどうかという点が述べられている『形而上学』θ巻六章のテキストだけでも、すでにそ

のような主張が成立しえないことを示していた。このいわゆるテンス・テストの記述はたしかに、その箇所の大きな部分を占めていて目立つけれども、しかし事柄自体としては、それは最初に提示された〈目的〉の観点を基準とする、行為の完全性と不完全性ということのひとつの例証として、従属的なかたちで言及されたものであることは、いま見られたとおりである。そして行為そのものの内におけるこの目的実現・未実現の意味での完全・不完全ということが、『ニコモコス倫理学』のほうでも主要論点をなしていることを想えば、それがアリストテレスにとつて、エネルギーとキーネーシスとの区別において副次的な観点でしかないなどは、とうてい考えられないであろう。

アクリルのしたことは結局、このように、〈目的〉に関する観点をことさらに軽視することによって事実上解釈から排除してしまい、実際にはこの観点の支配下にあつてはじめて充分な意味をもつ現在Ⅱ完了についてのシンタクテイカルな論点を、単独にただそれだけで取り出して、これをエネルギーとキーネーシスとの区別の解釈全体のかなめに据えることであつた。だが、現在が同時に完了でもあるかどうかというこの論点は、それに充分な意味を与えていた主導的な観点を剥ぎ取られて裸にされることによつて、必然的に形骸化せざるをえないだろう。そして形骸化された論点をかなめとして解釈されたエネルギーとキーネーシスとの区別の全体は、不可避的にトリヴィアルなものとなるであろう。事実、アクリルのように解するならば、アリストテレスにおけるエネルギーとキーネーシスとの区別の意味は、結局のところ、彼がその論文の肝心の部分で大きく引用しているZ・ヴェンドラー（第七章七ページの注参照）が行なつたのと同じような、さまざまな動詞または動詞句の用法的な区別と分類——それもヴェンドラーと比べて不完全な区別と分類——ということに、そのすべてが帰着することになるのである。

たしかに、アリストテレスが行なつたことは、動詞または動詞句の用法的な区別と分類という一面をもつていえる。しかし、彼がもつぱらただそれだけのことのためにエネルギーとキーネーシスとの区別を論じたというようにすることは、大局的に見ても、そもそもありうるはずがないであろう。すでに見られたように、エネルギーはアリ

ストテレスの形而上学と倫理学の最上層部分において重要な——まさに価値論的に重要な——役割を果している概念であり、そしてこのキーネーシスとの区別は『形而上学』と『ニコマコス倫理学』のなかで、それぞれそうした最上層部分を準備する箇所でも論じられているのである。こうした大きな論述の流れをつらぬいているモチーフを想えば、アクリルの解釈は全体として、著しいトリヴィアリティを露呈しているといわなければならない。そのことがわれわれの診断したように、アクリルの(C)の見解からの必然的な結果であるならば、すべて以上のような意味をこめて、われわれはこの(C)の見解を全面的に斥けなければならない。

さて次に、アクリルの論述の中心をなす前記(A)の解釈であるが、すでに(C)の見解の不当性についての以上の確認は、この(A)の解釈の不当性をも、確実に予告していた。現在が同時に完了でもあるかどうかというアリストテレスの論点は、それを導いている〈目的〉の観点から切り離され、ただそれだけで取り上げられることによって、形骸化することが予測されたのである。

事実、この切り離しによって、アリストテレスのこの論点は、もっぱら、動詞の現在時称と現在完了時称との同時使用の可能・不可能というシンタクティカルな観点からだけ取り上げられることになり、そしてこのことがさらに、その現在完了時称の使用を過去の時間帯に関連づけて理解する解釈(、Xの開始時点tから現在時点wまでのあいだにXしてしまった)へと、アクリルを導いた。^{*}結果として、この解釈によれば、エネルギーの完全性(Ⅱ完了性)ということとは、現在時点に先行する過去の時間帯に依存してはじめて成立しようするような完全性であることになり、その意味でエネルギーは、いわば時間に埋没しきっていることになる。

* しかし、ベナー(Ob. cit., p. 444)も注意しているように、エネルギーの例となる *hēdonai* (楽しむ) という動詞には、ギリシア語としてはじめから現在完了時称の形がないことを考えれば、こういう純粋にシンタクティカルな論点はそれほどアリストテレスの関心になかったといわざるをえないであろう。

しかしながら、この解釈をもう一度、アリストテレスの発言のコンテクストの中に置いてみると、これはいかにも奇妙な解釈ではあるまいか。もちろんアリストテレスは、エネルギー型の行為が、行為開始から一定の時間（いかに短くても）が経過した後に、はじめて完全などとは言っていない。それは「いかなる時点においても完全である」と、彼は『ニコマコス倫理学』K巻四章で強調しているのである。同じことはそこで、さらにまた「今」において起ることがひとつの全体である」(το τὸν ἐν τῷ νῦν ὅλον ἐστὶν, 1174b9, cf. a17) という言い方で語られている。この言葉はとくに、どう見ても、エネルギー型の行為が「ひとつの全体であること」(＝完全性)が過去の時間帯に依存して成立する、という解釈とは相容れないのではないか。少なくとも言葉の直接的な意味に沿うかぎり、まったく逆に、エネルギーの全体性・完全性は今、この現在において——過去のゆえにではなく端的に現在のゆえに——成立するものなのだ、自然に解されるであろう。完了が現在と一致して切り離せないという事実もまた、本来は、まさにこのことを告げるものだったはずである。

しかも、「今」において起ることがひとつの全体であるから」という右の言葉は、「楽しむこと」がキーネシスの場合と対比的に、「時間の内においてでなく「時間をとることなしに」起りうる」という言葉につづいて、その理由として語られたものである。アクリルはこのアリストテレスの発言に困惑しながら、強引にこれを処理しようとしたが(前章の(3))、しかしここまで来れば、もはやアリストテレスの言うエネルギーが、アクリルの意味において「時間の内にある」——過去の一定の時間帯を引きずりながら時間の内に埋没しきっている——と解する余地は、まったくないと言つてよいであろう。

アクリルが最初、アリストテレスの考えではエネルギーもキーネシスも時間を通じて進行すること自体に変わりはないという、一般的な主張のひとつの拠りどころとしたのは、『形而上学』θ巻六章における「もしそうでないと

したら、それは「キーネーシスの場合と同じように」いつかは終止しなければならないだろう」(1048p26)という言葉であつた(前章の(1))。しかしこの言葉もまた、この前後の箇所をはじめとして主要テクストにおけるアリストテレスの論旨が以上再確認されたごときものであるならば、アクリルが主張するような意味のことをそこから積極的に引き出すことは、誤りであろう。むしろアリストテレスは、エネルギー型の行為はいついかなる時点においても完全にあり、端的に今この現在においてその形相を完成し目的を実現している以上、「いつかは終止する」かどうかというようなことは、その行為自体にとって、そもそもはじめから問題にならないということを言っているのである。

アクリルの(A)の論点については、以上で充分であろう。そして残る論点(B)は、この(A)と連動して崩壊するはずである。なぜなら、アクリルによる「歩く」(キーネーシス)と「楽しむ」(エネルギー)とのパラレル性の指摘は、いま吟味された(A)のテンス・テスト解釈——完了の意味を、過去の一定の時間のあいだ(開始時点tからw時点までのあいだ)歩いてしまった、楽しんでしまったと解する解釈——の上に立って行なわれているからである。

こうしてわれわれは、以上の吟味によつて、エネルギーの思想的哲学的意義を最も脅かすかに見えたアクリルの解釈の実質的な部分を、斥けることができた。(C)に見られた解釈上の全般的態度が(A)の不当な解釈を結果せしめ、そしてその(A)が(B)の見方の基盤となっていたのである。われわれ自身がその前にアリストテレスの所論について提起していた素朴な疑問もまた、すべてが片づいたとはいえないにしても、そのひとつの徹底化としてアクリル的な形態をとるかぎりでは、処理されたことになるであろう。

ただししかし、アクリルの議論のうち、エネルギーであるべき「楽しむ」もまたその本来の目的語を加えて考えれば(例えば「第九交響曲を楽しむ」)、へどこからどこへという条件が加わった「歩く」の場合と同様に、いついかなるときにも完全である(完了している)とは言えないという論点だけは、アクリルのような完全性(完了性)の解釈と独立別個にでも、それ自体として有効に成立するのではないかという不安感が残るかもしれない。いったいこのこと

は、何を意味しているのでしょうか。キーネーシスであるべき「A地点からZ地点まで歩く」と、エネルギーであるべき「第九交響曲（の最初から最後まで）を楽しむ」とが右の点でパラレルに見えるというこの内には、どのような事柄が内包されているのであろうか。この問の追求によって、エネルギーとキーネーシスとの区別についてこれまで必ずしも表面に現われなかった幾つかの重要な問題点が、明るみに出されることになるかもしれない。そして、ペナーがアクリルの議論のうちこの点について行なった論評は、ちょうどそのために役立つであらう。

* (あらためて論文名を示すと) Terry Penner, *Verbs and the Identity of Actions* —— a Philosophical Exercise on the Interpretation of Aristotle, *Kyle* (ed. O. P. Wood & G. Pitcher), 1970, pp. 393 sqq.

アクリルを批判したこのペナーの長論文は、いくつものすぐれた着眼点を含んでいて（アクリル自身もこの論文を「good」と言っていた）、私がアクリルのテニス・テスト解釈（A）について述べた事柄も、いくつかの点でペナーの論述に負うている。ただし、批判の全体的な枠組となる観点は私のそれ（とくに、〈目的〉に関する基華の軽視を根本に置くこと）と基本的に異なっているし、また、後で指摘するように、彼自身が論文の副題に掲げた「philosophical exercise」の不足と思われる点もかなりある。

九 T・ペナーによる「歩く」「楽しむ」のパラレル性のつき崩しと、二局面構造説

前章の最後に示した問題点に関するペナーの論述の要旨は、次のとおりである。

アクリルが示した「A地点からZ地点まで歩く」と「第九交響曲（の最初から最後まで）を楽しむ」とのパラレル性は、まず、いわゆる「遅速テスト」の適用によってつき崩すことができる。なぜなら、「私は速く（遅く）歩いている」と言えるのと同じように、「私はA地点からZ地点まで速く（遅く）歩いている」と有意味に言うことができるけれども、他方、「私は速く（遅く）楽しんでる」とも、「私は第九交響曲を速く（遅く）楽しんでる」とも、有意味

に言うことはできないからである。すなわち、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』K巻三章においてキーネーシスと快樂（一般にエネルゲイア）との相違点の一つとして指摘した、「速く」「遅く」が言えるか言えないかということ、 \wedge どこからどこ \wedge に相当する限定条件が加えられても、両者を区別する標識として変らずに妥当して、上記二つの文が実際にはバラレルではないことを告げるのである*。

* このことはむしろ、「歩く」や「葉しむ」にかぎらず、一般にキーネーシスとエネルゲイアの他の諸例についても適合する。アクリル (*Op. cit.*, p. 136) は、この遅速テストについてのアリストテレスの注意をあまり重視しなかった。本稿第七章ベージの注参照。

このことは何を意味するか。「速く」「遅く」は距離と時間を要因として成り立つものであるから、キーネーシスについてはつねに「速く」「遅く」が言えるということは、キーネーシスが \wedge どこからどこまで \wedge （距離、またはそれに相当する変化の度合など）と \wedge いつからいつまで \wedge という二つのことを、その同定の基準または条件 (criteria or conditions of identity) として本質的に含んでいるということであり（『自然学』E巻四章 227b20~26）、逆にまた、この二つを同定条件として含んでいるからこそ、つねに「速い」「遅い」が言えるのである。このうち、 \wedge どこからどこまで \wedge のほうについては、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』K巻四章において、これをキーネーシスの \langle 形相 \rangle を規定するもの (*to todes pot' eidosion*, 1174b5) と言っていることは、すでに見られたとおりである。「A地点からZ地点まで」といった条件は、「歩く」の場合にたんに補うことができるというだけでなく、正確には、必ず補わなければならないのである。

* ペナー (p. 414) は、キーネーシスのこの二つの同定条件がならび、『自然学』Z巻の運動論を通じてくり返し現われるべき指摘してその箇所を列挙している (e. g. 235a14, 237a19~20, 239a23~24, 241a25~29, as well as 234b11, and 232b20, 236a30~31, b3~4, b10, 237a25, b23)。

こうして、二つの不可欠の条件である「どこからどこまで」と「いつからいつまで」とを共に明記して、「私は歩いている」というキーネーシスのあり方を記述すれば、次のようになる。

(Ex) (I am doing x & x is a walking & x is from A to Z & x is between t' and t'').——①

他方、これと対照的に、「楽しむ」——そして一般にエネルギー——については「速く」「遅く」が言えないという事は、エネルギーは右の「どこからどこまで」と「いつからいつまで」とを、その同定条件として含まない、ということを意味する。それでは、アクリルが論じたような「A地点からZ地点まで歩く」と「第九交響曲（の最初から最後まで）を楽しむ」との外見的なパラレル性は、何に由来しているのであろうか。

かりに、「私は第九交響曲を速く楽しんでいる」というこの奇妙な文が、そもそも何らかの意味をなすとしたら、それはどのような場合であるかを考えてみよう。それは、交響曲の演奏そのものが（何かの事情で）速く進む場合にほかないであろう。つまり、「楽しんでいること」が速く進むわけではないから、「速く」という副詞を右の文に無理にでも適用しようとするれば、それは「交響曲」という語に含まれている隠されたキーネーシス、動詞（例えば「交響曲を」演奏する）にかかるよりほかはない、ということである。

このささやかな言語的実験によって明らかになることは何か。それは、「私はA地点からZ地点まで歩く」と一見同じ構造に見える「私は第九交響曲（の最初から最後まで）を楽しむ」という文は、実は、「楽しむ」というエネルギー動詞のほかに、隠されたキーネーシス動詞を含んでいて、この二つの局面からなる事態を述べているのだ、ということである。すなわち、その論理構造は次のようになる（*to-ing* は隠されたキーネーシスを示し、*to-ing* は「私の楽しみ」と「第九交響曲」とのあいだの関係を示す）。

(3x) (3y) (x≠y & I am doing x & y is being done & x is an enjoying & y is a φ-ing & of (xy) & y is from the first chord to the last chord & y is between 'r' and 'r').——②

「私はA地点からZ地点まで歩く」の論理的構造を示した先の命題①を、この命題②と比べるならば、両者の違いは明白であろう。「私はA地点からZ地点まで歩く」と「私は第九交響曲を楽しむ」とは、こうして、文法的にはパラレルであるが論理的にはパラレルでないのである。後者の場合、へどこからどこまでとへいつからいつまでとを必然的に含むのは、したがってまた、いかなる時点においても完全である(完了している)と言えないのは、変項Yによって示されるキーネーシス(φ-ing)のほうだけであって、変項Xが示すエネルギーはそうでない。「楽しむこと」と「自体は、交響曲を楽しむのであれ、映画を楽しむのであれ、食事を楽しむのであれ、その発動のいかなる時点においても完全である。へどこからどこへ」とへいつからいつまでと、いう条件を免れているからである。アリストテレスの言っていることは正しく、アクリルのパラレル性の指摘は、見かけ上のものにすぎない*。

* 以上 *op. cit.*, pp. 411~422, 444~445.

以上が、アクリルが提起したこの問題に対するペナーの直接の答であるが、彼はさらに、「私は第九交響曲を楽しんでいる」という文の分析に見られたような、事態の二局面的構造の把握(“two entity” theory と呼ばれる)を他のさまざまな場合にも適用し、敷衍して行く。

例えば、キーネーシスである「歩く」の場合には必ずへどこからどこまでとを補わなければならないと言われたが、それなら、はっきりした目的地なしにただ何となく歩きたいから歩いているというような場合は、どう解したらよいか。アリストテレスはこの場合についても“two entity” theory をとったであろうと、ペナーは論じる。つまり、こ

のような通常単一の行動と呼ばれるものは、純粹の自然的能力(この場合歩行能力)の行使というエネルギーの面と、それに伴う運動というキーネーシスの面との、「いわば、内側の面と外側の面」から成っているのである。^{*}したがってその論理構造は、先と同じように、 x と y の二つの変項を使って表わされ、キーネーシスを示す y のほうには、距離と時間に関わる同定条件“From A to Z”と“between t' and t'”とがづくことにならう。

* *op. cit.*, pp. 439~440.

あるいはまた、「建築する」はアリストテレスにおいて、一般にはキーネーシスの典型例であるにもかかわらず、『ニコマコス倫理学』K巻五章(1175a34)では「建築を愛好する人々」(*oi praktoûntes*)¹が、幾何学者や音楽愛好者などと並んで「楽しみ(快樂)とともに現実活動する人々」(*oi meî hânonts êsopodures*)²の例として語られていることは、不整合の感じを与えるかもしれないが、これも先と同じ仕方の説明でできるであろう。つまりそのような場合も、事態は、純粹の建築活動、すなわち能力の行使そのものとしてのエネルギーの面と、それに伴う動きの過程としてのキーネーシスの面との、二局面構造をもっていると解されるのである。

ただしアリストテレスは、この箇所の前後では、そうしたひとつひとつの活動(エネルギー)と快樂との関係について、必ずしも快樂がそのままエネルギーであるのではなく、快樂が現実活動(エネルギー)と「共存」してそれを完成させる(*sunakelambanai……tên êsopetia hân telenai*, 1175a29~30)とか、それぞれに固有の快樂が一緒になって現実活動を増進させる(*sunabûsai……tên êsopetian h' oikeia h'doun*, 1175a30~31)とか、快樂は現実活動と密接不可分である(*sunektos tatis êsopetias kai dôlogistias*, 1175b32)とかいっただけで表現している。このことを考慮に入れたうえで、前述の二局面構造の上に「快樂」(楽しみ)の要素をさらに加えて表記するならば、「楽しみとともに建築に打ちこむ人」の場合の論理構造は次のようになる。

(3x) (3y) (3u) (I am doing x & x is an enjoying & I am doing u & u is a housebuilding & u is from shapelessness to shaped house & u is between t' and t'' & I am doing y & y is an exercising of my housebuilding skills & germane (x,y) & associated (y,u) & x≠y).^②*

* 以下 *op. cit.*, pp. 447~449 から直接関係ある論点のみを抽出。

なおまた『魂論』でも「同じく一般にはキーンネスの典型例であるはずの「建築する」が、エネルギーの例であった「思慮する」と組まれて、変様を蒙ることのない(したがってキーンネスではない)現実活動の例として語られている(B5. 417B~9: *tiô ob katás 'eyei 'hēteru tō pponobu, 'trau pponū, 'állarobotha, 'watep obdō tōu okrobōmu 'trau okrobōmū. Cf. F 7. 431A3~7*)。マツリル(*op. cit.*, pp. 140~141)もこの箇所を疑問点のひとつとして問題にしていたが、ペナー(p. 447, n. 47)はこれもまた「建築する」と「ここづは純粹の技術(能力)行使の局面から見られているからだと説明する。

一〇 ペナー批判(一)

——論理構造式の修正と、その意味するところ——

以上のようにしてT・ペナーは、アクリルの論じた「歩く」と「楽しむ」とのバラレル性を、直接には「遅速テスト」の適用によって、さらにはその“two entity” theory によって、つき崩すことに成功した。そしてさらに、問題視されるさまざまな事例——例えば、目的地なしにただ歩きたいから歩いているという場合や、楽しみとともに建築する人の場合(『ニコモコス倫理学』K巻五章)や、「建築する」が「思慮する」と同類のものとして扱われる場合(『魂論』B巻五章)など——を、同じ二局面構造説の適用によって巧みに説明した。

ペナーがアクリルの重要視しなかった「遅速テスト」の意義に着目したこと、とくに、この「遅速テスト」が、へど

こからどこまでとへいつからいつまでという二条件を含むか含まないかという、キーネーシスとエネルギー間の本質的な区別と結びついていることを指摘したのは、疑いもなく正当であり、アクリルが見のがしたアリストテレスの思想の重要な点をよく明るみに出したものとして、高く評価してよいであろう。

しかしながら、ペナーは、自分が提出した二局面構造解釈がさし当ってどのような帰結をもたらすか、そしてその帰結がさらにどのような哲学的問題を惹起するかということに、まったく気づいていないように見える。ペナーの「アリストテレス解釈における哲学的訓練」(彼の論文の副題)は、アクリルのそれよりも一歩進んでいるといえるけれども、これで充分であるとはどうい言えないのではないか。われわれは、ペナーの言う“philosophical exercise”を、彼の到達したところからもう少し先へ進めなければならぬ。

まず、いくつもの事例についてペナーが意欲的に提示している論理構造のフォーミュレーションが、彼自身の二局面構造説に照らして、はたしてこのままでよいかどうかを検討してみよう。

そもそもペナーの二局面構造説とは、彼自身の説明によると、次のようなものであった。

「一般に、私が行なう或る動きの内に自然的能力(a natural faculty)が含まれているならば、私が意図すると否にかかわらず、私は、(a)その能力を行使しつとあるとともに、(b)それに伴う動きをなしつとあるのであり、後者は速くまたは遅くなされるが、前者はそうでなく、(I am both (a) exercising the faculty and (b) carrying out the associated movement, the latter quickly or slowly, the former not.)。そして人は、意識的に一方だけを他方から切り離して選ぶことはできない。こうして、ひとつ単一の行動と考えられているものは、実際には二つの行動らしきもの(two action-like entities)であることがわかる。」(pp. 439~440)

この説明は、先に見られた「ただ歩きたいから歩く」といった事例(キーネーシスの典型例である「歩く」がエネルギーイアとなるように思われる場合)に関連して語られたものである。いうまでもなく、文中の(a)が歩行能力という一つの

自然的能力の行使としてのエネルギーの面、(b)がそれに伴う運動としてのキーネーシスの面であり、「私はただ歩きたいから歩いている」という事態のうちには、この二つが原理的に区別されながら、しかも分ちがたく結びついているというのである。

さてしかし、事情がかくのごとくであるならば、例えば「私はA地点からZ地点まで歩いている」という明確なキーネーシス表示文も、あらためてこれを見直さなければならなくなる。前章で見られたように、ベナーはこの場合の論理構造を

(3x) (I am doing x & x is a walking & x is from A to Z & x is between t' and t'')。——①

と書いて、これを「私は第九交響曲(の最初から最後まで)を楽しんでいる」という場合の論理構造式②と対照させて、両者はアクリルの主張に反して、けっして論理的にはパラレルではないと論じた。

けれども、この「A地点からZ地点まで歩いている」という事態にしても、当然そこには、歩行能力という一つの「自然的能力」の行使が含まれていなければならない(歩行能力を行使せずして、そもそも歩けるわけがないだろう)。すなわち、いま引用したベナーの一般の見解に従えば、この場合もやはり、(a)自然的能力(歩行能力)の行使というエネルギーの面と、(b)それに伴うA地点からZ地点までの動きというキーネーシスの面からなっていることになる。とすれば、ベナーの右の論理構造式①は、ベナー自身の注意に従って、さうそく

(3x) (3y) (x≠y & I am doing x & y is being done & x is an exercising of my faculty of walking & y is a φ-ing (walking) & of (x,y) & y is from A to Z & y is between t' and t'')。——①

と訂正しなければならぬであろう。そして、この①は、「私は第九交響曲を楽しんでいる」という場合の、

(3x) (3y) (x≠y & I am doing x & y is being done & x is an enjoying & y is a φ-ing & of (x,y) & y is from

the first chord to the last chord & y is between t' and t'')。——②

という先述の論理構造式と、こんどはペナーの主張に反して、完全にパラレルである。つまり、「私は第九交響曲を楽しんでゐる」という文が、ペナーの言うように「かくされたキーネーシス動詞」をもっているとすれば、「私はA地点からZ地点まで歩いている」という典型的なキーネーシス表示文は、かくされたエネルギー動詞をもっているといふべきであり、どちらの文が表示する事態も、二局面構造であるといふ点では同等なのである。

げんにペナー自身も、キーネーシスのもう一つの典型例「建築する」についてアリストテレスが語っている、「楽しみとともに建築する人」の場合を、x (||楽しみ)とy (||建築作業という動き)のほか、u (||建築能力の行使、すなわち、かくされたエネルギー動詞)を加えて、前章で見られた③のように記述していた。かりに「楽しみ」の要素をこのペナーの③から取り除いて、たんに「私は建築しつつある」といふ場合を考えれば、

(3x)(3y) (x#y & I am doing x & y is being done & x is an exercising of my housebuilding skills & y is a housebuilding & of (x,y) & y is from shapelessness to shaped house & y is between t' and t'')。——③

という、①および②とまったく同型の論理構造式となることはない。

他方、典型的にエネルギー型と思われる「観想する」(テオーリアー、テオーレイン)について考えてみよう。ペナーは、アリストテレスが強調する観想的活動の快楽を、先と同様にして

(3x)(3y) (I am doing x & I am doing y & x is an enjoying & y is a contemplation & germane (x,y) & x#y)。

——④

と記述している (p. 438)。

ところで、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』K巻七章・八章において、観想的活動は最も自足的であり、活

動のために必要なもの (*ta anagratia*) が他の種類の活動と比べて少ない、という意味のことを、再三にわたって強調的に語っている (1177a29~b1, 1178a23~28, 1178b33~1179a9)。ペナーはこのアリストテレスの言葉を——おそらくは正当に——「その活動に伴う動きのために必要なものがより少ない」(fewer of the things necessary for carrying out the movements associated with the exercising the virtue in question, p. 440, n.40) という意味に解する。すなわち、観想の活動といえども、なお不可避的にキーネーシスを伴う(ただそのキーネーシスのために必要なものが他の種類の活動よりも少ない)のであって、このことを説いたアリストテレスの言葉に、ペナーの “two entity” theory はよく合致すると主張するのである。

それならばしかし、先のペナーの論理構造式④は、この彼自身の主張に従って、「楽しむ」と「観想する」のほかに、このキーネーシスを示す変項をもう一つ加えた形に訂正されなければならないであろう。そしてここでもまた、「楽しむ」の要素を取り去ってたんに「私は観想しつつある」という場合を考えてみると、その論理構造式は、先の①や②や③と同型のものとなる(念のため旁をいとわず書いておく)。

(3x) (3y) (x≠y & I am doing x & y is being done & x is a contemplation & y is a φ-ing & of (x,y) & y is from A to B & y is between t' and t'')——⑤

さて、以上見られた事柄は、われわれに何を告げるであろうか。さし当って言えるのは、次の諸点である。

ペナーはその二局面構造説によって、アクリルの論じた意味での「楽しむ」と「歩く」との間のパラレル性をつき崩すことに成功したが、しかし——ペナーは気づいていないけれども——まさにその同じ二局面構造説は、ふたたび別の形でのパラレル性を招来することになった。すなわち、これまで見てきたように、「私はA地点からZ地点まで歩いている」(↓式述文①)も、「私は第九交響曲を楽しんでいる」(↓式述文②)も、さらに「私は建築しつつある」

(↓式述文③)も、「私は観想しつつある」(↓式述文⑤)も、これらキーネーシスとエネルギーの諸事例とされるものは、いずれも同じように二局面的構造(あるいは、「楽しみ」の要素を加えれば三局面的構造)をもつかぎりにおいて、論理的にパラレルであるといわなければならない。

そしてこのことによつて、さまざまの行為・行動を頭からエネルギー(「観想する」「見る」「思惟する」etc.)とキーネーシス(「歩く」「建築する」etc.)とのどちらかに配属させるカテゴリーカルな区別は、ふたたび崩れ去ることになる。アクリルの疑問も、もともとこのような“blanket classification”に対して向けられていたのであつた。

ただし、注意しなければならないのは、アクリルの場合は、彼が「テンス・テスト」に与えた先述のような解釈によつて、エネルギーとキーネーシスとの間の原理的な区別までも否定されてしまうことになるけれども、ペナーの二局面構造的な把握においては、アリストテレスが提示したエネルギーとキーネーシスとの原理的な区別そのものは確保され、生かされている、ということである。自説からの帰結の見きわめにおける上述のような眼力不足にもかかわらず、この点だけは依然として、ペナーの解釈のメリットと言つてよいであらう。

さてそこで、以上の批評をふまえてわれわれが問わなければならないのは、次のことである。

まず、これまでのところわれわれは、ペナーの二局面構造説を前提としたうえで、そこからさし当つてどのような事柄が帰結するかを見てきた。ではこの前提それ自体、ペナーの提出した二局面構造説そのものは、この問題に関するアリストテレス解釈として正当化されるかどうか。——あらかじめ言つておくと、私としては、これまでペナーによる言及が見られたテキストの諸箇所に加えて、さらに広く後で見るようなアリストテレスのさまざまな発言を考慮するとき、この問に対して肯定的に答えざるをえないと思う。ペナーの論説に批判を加えながら、かなり長くかかずらつてきたのも、ひとつはそのためであつた。

そして次に、もしこの二局面構造的な解釈が正当であるとすれば、この解釈から帰結することが見られた以上すべ

ての事柄は、いったい何を意味するのであるか。それはアリストテレスにとって、どのような哲学的問題を惹起することになるか。このことを、われわれはできるだけ遠くまで追求しなければならない。

一一 ペナー批判(2)

—— エネルゲイアとキーネーシスのそれぞれの〈主体〉は何か——

しかしながら、前章末に示した問題に取りかかる前に、そのための準備の意味もこめて、ペナーの論述自体において修正もしくは明確化を要する点をもう一つ、どうしても確認しておかなければならない。これもまた、非常に重要な問題と関係しているからである。それは次の点である。

ペナーがさまざまな事例について提示している論理構造式を通覧すると、彼は、エネルゲイアの面を記述するときにはつねに必ず「私は……している」(I am doing……)と書いているが、他方、キーネーシスの面を記述するにあたっては、あるときは「私は……している」と書き(先に見られた式述文①と③ = Penner (7), p. 417; (12), p. 449)、あるときは「……がされている」(…… is being done)と書いてくる(式述文② = Penner (7), p. 419)。キーネーシスの面については、どちらの表現をとるべきかにペナーはまったく無関心であるとしか思えない。^{*}

* さらに、肉体的快樂の場合のフォーミュレーション(8), p. 448; (11), p. 449)においては、キーネーシスの面についてこの点の表記をまったく省略してしまっている。

けれどもこの点は、けっして無関心であることが許されるような些末な事柄とは思えない。われわれはここでもまた、ペナーの「アリストテレス解釈における哲学的訓練」の不足を補わなければならない。そして、アリストテレス

の見解を汲んでベナー式のフォーミュレーションを行なうとすれば、キーネーシスの面の記述はけつして「私は……している」(I am doing ……)であつてはならず、必ず「……がされている」(…… is being done)でなければならぬことを確認し(すでにわれわれは先に示した①と③において、この点についてもベナーの記述をそのように修正しておいた)、さらにこのことが、どのような問題につながっているかを見届けなければならない。

〈動〉(キーネーシス)という事態は、「動かすもの」と「動かされるもの」との二つのファクターから成り立っている(自己運動者の場合も含めて)とみなされる。では、〈動〉の主体のありかを正確にとらえようとするとき、〈動〉はこの二つのファクターのどちらの内にあると厳密には言うべきか、という問題がアリストテレスにはあつた。この問題に対して彼は、『自然学』A巻において、先に見られた〈動〉の正式の定義——「可能態においてあるものの、その当の可能態としての資格における、現実態」(本稿第二章参照)——を提示したのち、この定義にもとづいて次のように判定を下す。

「困難な問題とされている点も、これで明らかになる。すなわち、〈動〉は動かされうるもの、のほうの内にあるのである。なぜならそれは、動かしうるものによる、動かされうるもの、の現実態だからである」(T3: 202a13-14)。

むろん、〈動〉という一つの事態において、「動かしうるもの」の現実態と「動かされうるもの」の現実態とは、事实上は別々のものではない。それは例えば、同じ一つの坂道が上り坂でもあり下り坂でもあるのと、同様である。しかし、定義の上では、両者は同じではない。そして、事実上は同じ一つのものである事態を〈動〉という観点からとらえるかぎり、〈動〉は「可能態においてあるもの(＝動かされうるもの)の……現実態」と定義される以上、〈動〉の主体(すなわち、「……の現実態」という主語的属格の形で表わされるべきもの)は、厳密には、あくまで「動かされうるもの」のほうなのである。これがアリストテレスの見解であつた。

同じ論点と同じ見解は、『形而上学』の巻八章(1050a23-28)において、さらに明確に示されている。

アリストテレスはこの箇所で、(1) ある能力を行使すること自体が窮極目的であり、そのことから別の所産が生じないような行為(例えば「見ること」の場合、視力の行使自体が目的であって、見ること自体のほかに別の所産が生じるわけではない)と、(2) 結果として別の所産が生じるような場合(例えば「建築すること」においては、建築作業自体とは別に家という所産が生じる)とを区別して、次のことを指摘している。

すなわち、結果として別の所産が生じる(2)の場合には、「その現実態は作られるものの内にある。例えば、建築することは建築されるものの内にある、織ることは織られるものの内にある、その他同様である。全般的にいつて、〈動〉は動かされるもの内にある*」。

これに対して、(1)の場合には、「その現実態は活動者自身の内にある。例えば、見る活動は見る者の内にあり、観想は観想する者の内にあり、生きることは魂の内にある。したがって幸福もまたそうである[魂の内にある]。幸福であることは、生きることの或る形態であるから。」

* ここで言われる例えは「建築されるもの」(τὸ οἰκοδομητέον)とは、『自然学』I巻一章におけるのと同様、完成された「家」という所産のものではなく、「家」へと形作られつつある石や木材などの素材(家となりうる)という可能性をもつもの)のことである。ロスのこの箇所への注は、『自然学』I巻一章への注と同様、誤っている。

ここで提示されている(1)の場合と(2)の場合との区別が、エネルギーとキーンネーシスとの区別とまったく同じものであるかどうかは、けっして速断することはできない*。けれども、少なくともここで挙げられている例——(1)の例としての「見ること」「生きること」「観想」「幸福」、(2)の例としての「建築」——は、これまで見てきたエネルギーとキーンネーシスとのそれぞれの例と同じものであるし、事実また(2)に関する事柄はここで、「全般的にいつて、〈動〉(キーンネーシス)は動かされるもの内にある」という言葉で総括されている。したがって、こ

の(1)と(2)の区別は、アリストテレスの考えの中で、事実上エネルギーとキーネーシスとの区別と、重なり合っているとみなすことができるであろう。

* アリストテレスにおいて、(1)当の活動自体のほかに特定の所産が生じない場合と、(2)所産が生じる場合とのこの区別は、あるときは〈行為〉(フラークシス)と〈製作〉(ポイネーシス)との区別を示し(e.g. *Ethica Nic. Z 5, 1140b5~7*)、あるときはまた〈観想〉(テオリアー)の活動を、〈行為〉と〈製作〉を合わせた広義の実践的活動から区別するために用いられている(e.g. *Ethica Nic. K7, 1177b1~4, 13~15, 18, 20*)。〈観想〉と対比される意味での〈行為〉も、広義における何かの所産や成果をもたらすか否かである。

いずれにしても、ペナー(p. 439, n. 37)はこの(1)と(2)の区別を、エネルギーとキーネーシスの区別と同一のものとしている。われわれにとってはしかし、この点が後にきわめて重要な問題となるであろう(本稿第一四章)。

このようにして、先述の『自然学』I巻三章における見解表明と併せて、キーネーシスの主体はけっして「動かすもの」の側に、「活動者自身」の側にあるのではなく、あくまで「動かされるもの」のほうに、活動者によって働きかけられる対象のほうにあるというのが、アリストテレスの堅持した考えであったことが知られる。したがって、このかなり特色のあるアリストテレスの見解に沿うかぎり、もしペナーのように二局面構造的な記述をすれば、エネルギーの局面については、「活動者自身」としての「私」を主語として、*I am doing ……*と書くのが正しいが、しかしキーネーシスの局面については、動かされている対象をそのまま直接に主語とすることはできないにしても、やはり必ず、「……が、されている」(…… *is being done*)と書くのが本来であろう。少なくとも、けっしてエネルギーの面と同じように、「私」(活動者自身)を主語(主体)に置いてはならないことは明らかである。

いずれにせよ、アリストテレスがキーネーシスの(およびエネルギーの)主体のありかについて、これほどまでにはっきりと見解を表明している以上、この点の表記についてペナーのように無差別・無関心であることは許されない

であろう。

そしてこの点はけっして、たんにフォーミュレーションの仕方についてのテクニカルな問題にはとどまらない。—— いったい、アリストテレスにとって、エネルギーとキネーシスとのそれぞれの主体は、さらにつきつめて考えると、何でなければならぬだろうか。

エネルギーの主体は「活動者自身」であるとみなされるべきことが、いま見られた。「活動者自身」とは、先の『形而上学』Ⅹ巻八章のテクストによれば、例えば、見るこの場合は「見る者」、観想の場合は「観想者」、そして生きることや幸福であるこの場合は「魂」であると語られていた。生と幸福については、その主体として「魂」(プシューケー)が名指されている。しかし、ここで挙げられている「見る」という感覚・知覚の能力も、「観想する」という思惟・思考の能力も、アリストテレスが『魂論』B巻三章(414a29~32, cf. B 2. 413a23~25, b12~13)で挙げている魂の能力 (*en psychikis tēs dūnēs*) にほかならないのである。とすれば、見ることや観想することの場合もまた、生きることや幸福であるこの場合と同じく、その主体はさらに窮極的には、魂(プシューケー)であるといわなければならないであろう。

周知のように、アリストテレスが『魂論』B巻において正式にプシューケーの諸能力として挙げるのは、右の感覚能力や思惟能力のほか、生長・生殖の能力、欲求能力、そして運動の能力である。われわれはこれまで、見ることや観想することにとどまらず、例えば歩行能力の行使や建築能力の行使などの、一般に「自然的能力の行使」をエネルギーアとして扱ってきた。これら歩行能力や建築能力もまた、それぞれ運動能力と技術知の能力のひとつとして、当然プシューケーの能力とみなさなければならない。自然的能力の行使としてのエネルギーアとは、すべて、プシューケーの能力の行使にほかならないのである。こうして一般に、キネーシスと対置される場合のエネルギーアの主体は、プシューケーでなければならない。^{*}

* 「魂」を「プシューケー」という原語のカナ書きに代えたのは、「プシューケー」が本来、「魂」「心」「生命」という意味をかばう語であつて、「魂」という訳語だけでは狭すぎるからである。

では、キーネシスについてはどうであろうか。その主体は、〈動〉を構成する「動かすもの」と「動かされるもの」との二つのファクターのうち、「動かされるもの」のほうでなければならぬことが、先に言われた。運動（すなわち、場所的なキーネシス）の能力の行使は、いま見られたようにプシューケーの働きであるが、運動という事態そのものは、定義上、その能力行使によって動かされるもののように主体があると、アリストテレスは考えるのである。では、キーネシスの主体とされるこの「動かされるもの」(τὸ κινούμενον ἢ «動くもの」の意味にもなる)とは、どのような本性のものでなければならぬか。

エネルギーとキーネシスとの区別を論じた主要テクストの一つ、『ニコマコス倫理学』K巻四章(本稿第三章を見よ)をふり返ってみよう。そこでは、快楽や見ることがキーネシスそれ自体でもなく、またそのキーネシスというものもありえないことの理由として、一般にキーネシス(および生成)とは「部分へと分けられうるもの」(τὰ μεριστά) についてのみ言えることである、と注意されていた(1174b10~11)。すなわち、「動かされ」また「動く」ところの当のもの、キーネシスの主体でありうるものは、分割可能という性格のものでなければならぬのである。

このことは、『自然学』Z巻において、キーネシスを含めた「変化」(メタボレー)一般の分析のなかで確認される重要な論点の一つであった。——すべて変化は、何か(A)から何か(B)への変化である。変化するもの(x)は、それがBにおいてあるときには、もはや変化していないし、Aにあるときには、いまだ変化していない。しかるに、xがAから変化して最初に、至る状態(性質的変化の場合)または位置(場所的運動の場合)がBであるとすると(つまり、AとBが変化の過程における相接続した状態または位置であるとすると)、xがAからBへと変化しつつあるとき、x

が全体としてAとBの両方においてあることも、AとBのどちらにもないということも、ともに不可能である。だから、その場合、Xの「一部はAに、一部はBにあるのでなければならぬ」。したがって、変化するものはすべて、必ず分割可能なもの (*diastecton*) でなければならぬ」と結論される*。

* *Phys.* Z. 4. 234b 10~20. cf. Z. 9. 240 a 19~26, *Metaph.* Γ. 5. 1010 a 15~22. — プラトンの『パルメニデス』 156C~D における、同様の变化の分析との比較が後に問題となろう(本稿第一五章)。

そして「分割可能なもの」とは、ある一定の大きさをもつものことにはかならない。事実、右の『自然学』Z巻四章においても、「分割可能なもの」(ディアイレトン)という言葉は、少し先で「大きさ(をもつもの)」「メゲトス」という語によって置きかえられている*。

そしてさらに、「大きさをもつもの」とは、例えば数学における線分や平面図形であってもよいが、しかし動や変化という自然学的な主題の枠内では、それはむしろ原料を有する物体であり、物でなければならぬ。アリストテレスの自然学的著作のなかでは、「大きさ(をもつもの)」「メゲトス」という語は、しばしば「物体」「物」(ソーマ)と同義に用いられる*。アリストテレスにとって、キーネーシスの主体となるもの、「動き」または「動かされる」ところのその当のものは、こうして結局、物体(物)にはかならない。「キーネーシスは、自然的物体がなければありえない」(『天体論』A巻九章 279 a 15~16)のである。

* Z. 4. 234 b 29, 34. — このように、動きまたは動かされるものは、分割可能で大きさをもつものでなければならぬから、逆に、みずからは動くことのない不動の第一動者は、分割不可能で部分をもたず、いかなる大きさをもたない (*ἀδιαιρέτων ἐστὶ καὶ ἀκίνητος καὶ ὀυδὴν ἔχει μετέωρος*) と云ふことにならぬ (*Phys.* θ. 10. fin.)。

** *De Generatione et Corruptione* A. 5. 320 a 29~31, 321 b 15~16, *De Caelo* A. 6. 273 b 23~25.

このようにして、われわれは本稿において最初、アリストテレスにおけるキーネーシスとエネルギーとの対置をかりに「運動の論理」と「活動の論理」との対置と呼び、前者を「物があって、その物が時間・空間の中で動く」と簡略的に表示していたが、この「物があって、その物が……」という表示は、字義通りにアリストテレスの見解の表示であったといえる。そして、これに対する「活動の論理」の主語（主体）となるのは、窮極においてプシューケー（心、魂、生命）であることが確認されたわけである。

一一二 二局面構造的解釈の不可避性

さて、これだけの手続きをへたうえで、先に提出された問題（第一〇章末）に立ち帰ることにしよう。その問題とは、ペナーが行なったような二局面構造的な把握はアリストテレス解釈として正当であるかどうか、そしてもし正当であるとすれば、さし当りそこから帰結することが見られた事柄——簡単にいって、アクリルの解釈に見られたのとはまた違ったかたちでのパラレル性の招来——は何を意味し、どのような哲学的問題を惹起することになるか、ということであった。

前章の考察の結果を考慮に入れて、われわれは二局面構造解釈を、「いかなる行為・行動も必ず、(a) プシューケーの自然的能力の行使としてのエネルギーの面と、(b) 物の動きとしてのキーネーシスの面とからなる」という主張として示すことができる。この主張は、(1) アリストテレスがキーネーシス型の例として挙げるいかなる行動も必ず (a) の面を含み、他方また、(2) エネルギー型の例として挙げるいかなる行為も必ず (b) の面を含む、というかたちに言い換えることができるから、もしアリストテレスがこの (1) と (2) の見解にコミットしていることが認定できれば、右の二局面構造解釈は、アリストテレス解釈として正当であることになるであらう。

このうち、(1) 人間のすべての行動が必ず (a) のプシューケーの能力行使という面を含むということは、事柄自体としては自明に近い。すでにわれわれはこの見地から、キーネーシスの典型例とされる「歩く」や「建築する」の場合の論理構造式を、(a) と (b) を含む二局面構造的な④や③の形で示したのであった(本稿第一〇章)。事実また、アリストテレスとても、前章で言及された『魂論』B巻で彼が挙げている思考能力、感覺能力、運動能力から生殖・生長の能力に至るまでの、これら「プシューケーの諸能力」のどれ一つも関与しないような人間の行動が、そもそもありうるなどは考えないであろう。すでに見られたように、彼が同じ『魂論』B巻の第五章(417b8~9, cf. 7. 431a3~7)において、他の箇所ではキーネーシスの例とする「建築すること」を、エネルギーの例とされる「思慮すること」と同列に並べて、変様を蒙むことのない(したがってキーネーシスではない)現実活動の例として語っていることや、また『ニコマコス倫理学』K巻五章(1150a32)において、「建築を愛好する人々」を「楽しみとともに現実活動する人々」の例として語っていることは、やはりアリストテレスが事実上、右の(1)の見解にコミットしていることを示すものといえる。

では、(2) はどうか。アリストテレスは、人間に可能なかぎりでの最も純粋なエネルギー型の活動である、知性(ヌックス)の現実活動態としての「観想」について、それが他の種類の活動とくらべて必要物がより少ないということ(最も自足的であること)を、そのすぐれた特質の一つとして語っていた(『ニコマコス倫理学』K巻七章・八章——本稿第一〇章参照)。目下の問題の枠内でとらえると、このアリストテレスの論旨は、やはりペナーのように、その現実活動に伴うキーネーシスのために必要なものがより少ないという意味に解するほかはないように思われ、したがって、われわれがまさにこの点でのペナーの不徹底を批判しつつ論理構造式⑤の形で提示したように、エネルギーの典型例である「観想」の活動といえども、なお不可避免的に(b)のキーネーシスの面を伴うという、(2)の見解を示すものと受けとらなければならないと思われる。

事実また、アクリルもペナーも注意していないけれども、アリストテレスがこの(2)の見解をとっていることをさらに強く示すような発言に、われわれは他にも出会うのである。それは、エネルギーの特質であった非時間性ということに関連してである。

キーネーシスが時間の内にあるのに対して、エネルギーは本質的に非時間的であるということについては、この点がエネルギーとキーネーシスとの原理的な区別にかかわるかぎり、われわれはアクリルの解釈を批判しつつ、これが間違いなくアリストテレスの基本的見解であることを再確認した(本稿第七章)。しかしながら、実際の人間における活動のあり方が問題となる場面では、アリストテレスの語り方はおのずから異なってくる。なぜなら、この場面では、「すべて人間のことは、連続的に現実活動をつづけること (αὐτεὶς ἐνεργεῖν) が不可能である」(『ニコマコス倫理学』K卷四章 1175a4b) というのが、実情であると言わざるをえないからである。だからまた、この観点から見られるとき、「固有の快楽はもうもろの現実活動を、より長時間つづくもの (μακροτέρως) たらしめる」(K 5, 1175b14) ということが、同じ『ニコマコス倫理学』K卷において語られることになる。

そして、先にわれわれは、エネルギーの典型例であった「観想」の活動について、ペナーが言及した「必要なのがより少ない」という点(自足性)だけを問題にしたが、そもそもアリストテレスが『ニコマコス倫理学』K巻七章において、この知性の観想的活動こそが人間にとっての「完全な幸福」にはかならないことを論じるにあたって、そのすぐれた特性としてそれよりも先に挙げているのは、観想的活動が他の活動とくらべて「最も連続的である(最も長く(μακρόν)) (αὐτενεργεῖν, 1177a2) ということであった。のみならず、この観想的活動が人間の完全な幸福でありうるのは、この活動が「完全な生の長さを得たならば」(καθόλου μῆκος βίῃς τέλειον, 1177b25) という条件のもとにおいてであると、彼は言うのである。もともと、幸福(これもエネルギーの例の一つであった)の実現のためには、それに応じた生(これもエネルギーの例であった)の長さを必要とするという考えは、『ニコマコス倫理学』の最初か

ら見られるものであった (A 7. 1098a18 sq., A 10. 1101a11 ~ 13. al)。

「最も連続的である(長つゞきする)」とは、最も長時間持続するということであり、「生の長さ」とは時間の長さ
にほかならない。時間に関するこうした事柄は、エネルギーと対置されるキネーシスについてののみ、言われうる
ことであつたはずである。キネーシスならぬエネルギーの典型的なあり方としての知性の観想的活動について、
アリストテレスが右のように語らなければならなかつたことは、かなり深刻な事態を告げている。この事態の意味す
るところは、いづれもう少し詳しく説明されなければならぬ。さし当つてはしかし、もしアリストテレスがそのと
きどきによって全く矛盾したことを語っているのでないとするれば、われわれとしてはやはり、彼が問題のどのような
場面においてそれぞれの発言をしているかを区別して、解釈するほかはないであらう。

すなわち、アリストテレスは一方において、彼が大切なモチーフを託したエネルギー概念それ自体の意義を明確
に打出すために、時間性に関する点も含めてキネーシスとの原理的な区別・対比を鮮明に提示するとともに、他方
しかし、人間におけるその実際の発動においては、どれほどエネルギー型の活動であつても時間の制約下にあり、
「物」が主体となるキネーシスの要素を伴わざるをえないと見ている(すなわち、上述の(2)の見解をとっている)、
と解さざるをえないのである。

このようにして、本稿の最初からこれまでに見られたアリストテレスのすべての論述を考慮に入れて、その諸発言
を整合的に解釈するためには、われわれはどうしても、この章の最初に示したかたちでの二局面構造解釈をとらざる
をえないことが、確かめられたと思う。すなわち、人間のいかなる行為・行動も、互いに原理的に区別された二つの
要素または局面、(a) プシューケーの自然的能力行使としてのエネルギーと、(b) 物の動きとしてのキネーシ
スとからなる、というのがそれであつた*。

* 二局面構造解釈を提出したベナー自身は、それがすべての行為・行動に妥当するとは必ずしも言っていない。彼は、「ほと

んどの行為」(most actions, p. 451)に於いてこの解釈が妥当すると言ひ、あるいは「もし私の行なう或る動きの内に自然的能力が含まれているならば」(If there is a natural faculty involved in some movement I carry out, then,……, pp. 439-440)という条件文の形でこの解釈を主張している。しかし、ペナーのこの用心深さ(?)が全く何の意味ももたえないことは、以上見られたこと(第一〇章で見た彼自身が言っていることも含めて)から明らかであろう。

そしてこのように、いかなる行為・行動も (a) エネルゲイアの面と、(b) キーネーシスの面との両面からなるとすれば、当然、アリストテレスが『形而上学』θ巻六章その他で表明した、行為・行動そのもののカテゴリカルな分類——エネルゲイアとキーネーシスとのどちらかにきっぱりと分類すること——は、不可能になる。このことは、すでに見られたとおりである(本稿第一〇章末)。アリストテレスの意図を汲んで言えるのはただ、(a)の面が主となるような、より、エネルゲイア的な行為と、(b)の面が主となるような、より、キーネーシス的な行動とのあいだの、相対的な程度の差異があるということだけであろう。ただし、相対的であるにせよとにかくこのような差異が成立するのは、エネルゲイアとキーネーシスとの原理的な区別が確保されているからにはかならない。

——以上が、われわれの素朴な疑問(本稿第六章)から出発して、アクリルやペナーの解釈を検討・批判しながら、アリストテレスの語るところに導かれて到達した当面の帰結である。

一三 アリストテレスへの問

さてそれでは、帰結として確認された以上すべての事柄はさらに何を意味し、どのような問題を惹起するであろうか。

まず直視しなければならないのは、人間における最もエネルゲイア的な活動とても必ずキーネーシスの面を伴って、

不完全なエネルギーとしてしか発動しえないということは、とりもなおさず、エネルギーが実際には必ずエネルギーに類同化され、あるいは還元されることにほかならない、という事実である。「不完全なエネルギー」とは、もともとキーネーシスの呼称にほかならなかったからである(『自然学』7巻二章 201b31 その他——本稿第二章参照)。

前章で見られたように、「エネルギー」という語について「より長時間つづく」とか「最も連続的である(長つづきする)」とかいった時間にかかわる形容語が語られていることや、知性の観想的エネルギーが完全な幸福であるための条件として「完全な生の長さを得たならば」と語られていることは、ここであらためて、まさにこのキーネーシスへの類同化を告げる証左として確認されなければならないであろう。「生の長さ」とは、まぎれもなくへいつくらい(つまりで) (Between 'r' and 'e') というキーネーシスの同定条件を示す表現にほかならない。つまり、『ニコマコス倫理学』K巻四章で強調的に語られていた、「キーネーシスが完全であるのは、要する時間の全体においてであるか、あるいは、その完成時においてであるかである」(1174a21) という、エネルギーと対比的なキーネーシスの特色が、知性(思惟)のエネルギーとしての「完全な幸福」について、そのままではまることになるのである。それはもはや、「いかなる時点においても完全である」とはいえないし、また「幸福であると同時に幸福になってしまつて、い」ともいえないことになる。

そして、もしこのように、人間のすべての行為が実際にはキーネーシスのなあり方としてしか発動しえず、最もエネルギー的な活動でさえキーネーシスに類同化されるのであるならば、そもそもエネルギーとキーネーシスとの区別を立てること自体が、あまり意味がないのではないか。——われわれはアリストテレスに対して、こう問わなければならない。

われわれのこの問に対して、アリストテレスは、おそらく次のように答えるであろう。

——たしかに人間にとっては、完全に純粹なエネルギーというあり方は不可能であり、その意味では「キーネーシ

スへの類同化」が避けられないということを認めてもよいであろう。けれども、これもすでに認められたように、エネルギーとキーネーシスとの原理的な区別が確在していることによって、人間のさまざまの行為や活動のあいだには、そのような「類同化」そのもののうちにあつてなお、ある行為・活動がどの程度エネルギー的（非キーネーシス的）であり、どの程度キーネーシス的（非エネルギー的）であるかという、差異と序列が存在する。そしてこの差異と序列は、人間の生き方に指針と目標を与える。なぜならば、この差異と序列において、キーネーシス的な行為とは、その行為自体以外の他のもののゆえに選ばれるものの意味するのに対して、エネルギー的な行為とは、それ自身のゆえに選ばれる行為、当の行為自体が目的であるような行為であつて、その最高の形態が知性（思惟）の観想活動にほかならず、これが人間の窮極的な幸福を保証するものだからである。人間は、これを目ざして生きなければならぬ。このように、エネルギーとキーネーシスとの区別は、それにもとづく行為間の差異と序列が生き方に対するひとつの明確な指針と目標を与えるものである以上、あまり意味がないどころか、きわめて重要な意味をもっているのである。

——『ニコマコス倫理学』K卷六章（1176a35～b9）と七章（1177a17～b26）の論述は、われわれの先の問に対して、このように答えているように思われる。

しかしここまで来て、あらためてこの『ニコマコス倫理学』K卷六章・七章の論述について疑問となるのは、なぜアリストテレスがここで直接語っているような活動間の差異と序列が、そのまま彼の言う意味での価値的な差異と序列でなければならないか、ということである。価値的な差異と序列であつてこそ、それは重要な意味をもつといえる。しかしこの点は、必ずしも一見そう見えるほどには、自明でもなければ必然的でもないのではないか。

そもそもこの差異と序列は、アリストテレスが右の箇所（幸福）の問題へと考察の主題を移したときに、

「もろもろの現実活動のうち、或るものは必要（必然）な活動であり、他の事柄のゆえに選ばれる活動であるが、或るものはそれ自体として選ばれる活動である（したがって「幸福」は、明らかに後者のうちに求めなければならない）」

という言葉によって導入されている。これは「他の事柄のゆえに選ばれる(望ましい)活動」と「それ自体として選ばれる(望ましい)活動」とのあいだの、すでにそれ自身価値的な差異の表明にほかならないが、この差異が実際に意味するところは、すぐ後で説明されているように、その活動自体とは別に何らかの目的ないし所産が存在するような活動と、そうでない活動との区別である。この区別の観点は、第七章に入って知性の観想活動がもつすぐれた特質が列挙されるにあたって一貫して、今度は観想的活動と実践的活動との価値的な差異——前者の優位——を説明するための観点として、くり返し強調されている*。

* K7. 1177b1~4, 13~15, 18, 20——活動自体とは別の所産・成果の有無ということはずで述べたように(本稿第一章三〇ページの注参照)、〈行為〉と〈製作〉を区別するための観点としても用いられるが、〈完全な幸福〉を論ずるこの重要な場面では、〈行為〉もまた広義の所産・成果・目的を別に有するとみなされて、この観点から〈観想〉と対比されることになるのである。そしてアリストテレスにとっては、しばしば語られる〈行為〉と〈製作〉の区別 (*Ethica Nic.* Z 2. 1139b1~3, Z 4. 1140a2~6, 16~17, Z 5. 1140b6~7, *Polit.* A 2. 1254a5~6) よりも、〈観想〉と〈行為〉〈製作〉とのあいだに引かれる区別のほうが、初期の『ポロテネティコス』(Fr. 6. 12, 13, 14, a1) 以来この『ニコマコス倫理学』K巻に至るまで一貫して、根本的に重要であったと見ることができると推測される。拙稿「観ることと為すこと」(『西洋古典学研究』第二二号、一九七三年)、「形而上学」の存在理由」(『哲学』第二四号、一九七四年)参照。

当の活動自体とは別の(広義の)所産が結果として生じるような活動と、そうでない活動とのあいだのこの区別は、すでにわれわれが『形而上学』θ巻八章において出会ったところのものであり、そこでは、この区別がアリストテレスにおいて、事実上エネルギーとキーネシスとの区別と重なり合っていることが見られた(本稿第一章)。この事情は、いまの『ニコマコス倫理学』の箇所においても同様であるといえるけれども、いづれにせよ、ここで価値的

な差異と序列として前面に立てられているのは、このような区別の観点にもとづく活動間の差異と序列なのである。

しかしながら、この区別——行為・活動における特定の目的・成果・所産の有無——がそれ自体として価値的な優劣を意味するということは、はたして一般的に自明なことであろうか。けっしてそうとは思えない。いったい、或る目的をめざして努力すること、そしてその成果として何らかの所産が生じるということが、なぜそのことだけで、その行為や活動の価値が低いことの徴候とみなされなければならないのだろうか。また逆に、なぜ知性の観想的活動は実践的活動（正義・勇気等の倫理的徳にもとづく政治的活動や倫理的活動）とくらべて、観想すること自体のほかに何も所産や成果が生じないという理由によって、価値が高いと判定されなければならないのだろうか。——われわれはふたたびアリストテレスに対して、このように問わなければならないであろう。

この点についてのアリストテレスの答は、結局のところ、それが神のあり方にほかならないからである、ということであったし、事実また、それ以外にありえないはずである。

むしろその前に、知性の活動が最もすぐれているのは、知性（ヌクス）そのものが人間の内なる最もすぐれたもの、最も神的なものであるからだ、という論点がある（K. 7. 1177a13～17, 19～21）。しかしこの論点は、それだけでは必ずしも、ほかならぬ知性の観想的活動——上述の特色をもつ活動——こそが最もすぐれているということの論拠にはならないであろう。^{*}げんにプラトンも、知性（ヌクス）が人間の内なる最もすぐれたもの、最も神的なものであるということは、アリストテレスに劣らずこれを強く主張する（むしろこの点は、アリストテレスがプラトンから学んだところであるといふべきか）。けれども、この同じ主張を共有しながらも、アリストテレスが言う意味での観想的活動の実践的活動に対する優位性ということは、プラトンの考えにはない。例えば〈技術〉についての見解ひとつとってみても、そのことは明らかであろう。一般に〈技術〉はむしろ何らかの所産のためにあるから、アリストテレスにおいては知性の観想的活動から排除されて、正式の場面では第一級の価値を与えられないけれども、プラトンにおいては、〈技

術〕は「知性の所産」であり、あるいは知性と並んで万有の生成と秩序の根源に位置づけられる。^{*}知性そのものが「作るもの」(ポイウーン、デーミウールグーン)「原因」^{***}とみなされているからであり、これが『ティマイオス』の宇宙創造のミュートスにおいて、万有の作り主(ポイエーター、デーミウールゴス)としての神となつて現われることは、周知のところであらう。——こうして、人間にとつて知性の(行為的・製作的活動でなく)観想的活動こそが最もすぐれた活動であるとアリストテレスが主張しうるためには、知性それ自体が神的存在であるということのほか、どうしても別の論拠と前提が必要である。それがすなわち、その知性が「神的存在であること」の内容をなすところの、アリストテレス独自の神概念にほかならない。

* アリストテレス自身も、『ニコマコス倫理学』K巻七章の最初の部分では、知性の活動であることと観想的活動であることとを、一応区別しているように見える(1177a17~18: *ἡτις ὁ ἐστὶ θεωρητικὴ, εἰρηναία*)。

** 『法律』I〇巻 890D, 892B, a1.

*** 『ソポス』26E~27B+30D~E.

そのような神概念は、『ニコマコス倫理学』の第八章に進んでから全面的に表に現われる(1178b7~23)。よく知られたこの箇所の記述のすべてを、逐一ここでくり返す必要はあるまい。要するに、最もすぐれて最も幸福な存在としての神々は、およそいっさいの実践的な行為(プラークシス、プラッティン)をなさず、ましてやものを作る(ポイエイン)こともなく、その活動はただ観想的活動あるのみ。したがって、人間のさまざまな活動もまた、この至福の神々の活動のあり方に最も近く最も似た活動のあり方——行為でも製作でもなくただ観想的活動——こそが、最も幸福を保証すると説かれているのである。

この独自の「神まねび」の思想を展開するアリストテレスの言葉は雄弁であり、格調高くさえある。しかしながら、

先のわれわれの問に対する答として見るならば、このアリストテレスの説明が説明としての効力をもちえないことは、おのずから明らかであろう。なぜなら、「なぜ観想のための観想活動は、所産を伴う実践（行為、製作）の活動よりもすぐれているか」という問に対して、「それは最もすぐれている神々の活動にほかならないからである」と答えることは、論理的には「それは最もすぐれているから最もすぐれているのである」という同語反覆でしかなく、新たに加わっているのはただ、「神々」という名前による情動的な権威づけだけだからである。

むしろまた、このアリストテレスの神の観念そのものも、きわめて興味ぶかい特色をもっていることは事実であるが、けっして一義的に自明なものではなく、万人の承認する神の観念であるというわけには行かないであろう。それは、例えばプラトンにおける神の観念とくらべてみても大きく異なっている。プラトンの神は上述のように、作り主・製作者（ポイエーターズ、デミウールゴス）として語られるような神だからである。また、アリストテレスは正しき、という倫理的徳性を、それが行為にかかわる徳性であるがゆえに神々の活動から排除したが（1178b10～12）、至福の神に範を求めるプラトンの同じ「神まねび」の思想においては、「神は可能なかぎり最も正しく、あるがゆえに、最も神に似るとは最も正しい人間になること」というのが、その中心的な論旨となっているのである（『テアイテトス』176b～c）。

しかしそれにしても、アリストテレスの神は、行為せず、ものを作らず、ただ観想するのみという。ではいいたい、何を観想するのであるか。その知性の思惟活動は、何を思惟するのであるか。——この問は、アリストテレス自身が『形而上学』4巻9章（1075b21～26）において実際にたずねている問（εἰ ποτέ）であった。しかしいまは、この問がアリストテレスの思想の中では必然的に行き着かざるをえない答（ἀποκρίσειν ἕνα ποτὲ, …… καὶ ἕτερα ἢ ἄλλοις ποτὲ ποτὲ）の意味について、論じることがはひかえなければならぬ。目下の考察にとっては、われわれの先の問に対するアリストテレスの答について、その説明としての効力を見届けることが、必要にして充分な手続だったからである。

すなわち、本章においてわれわれは最初、もともとの問題であったエネルギーとキーネーシスとの区別に関連するアリストテレスの諸発言をふまえたうえで、人間における最もエネルギー的な活動ですらも事実上キーネーシスへ類同化されなければならないとすれば、そもそもエネルギーとキーネーシスとを区別すること自体が、あまり意味をもちえないのではないかと、という疑問を提出した。これに対するアリストテレスの答は、この区別にもとづく活動間の差異と序列が、人間の生き方に指針と目標——最高の幸福——を与えるものである以上、重要な意味をもつということであつた。われわれはこの点に關する『ニコマコス倫理学』の記述に即して、ではなぜ、この活動間の差異と序列がそのような価値的な意味をもちうるのかと、ふたたび問うていたのである。

こうして、この最後の問に対する「それは神々の活動のあり方を範とし基準とする差異と序列であるからだ」というアリストテレスの答が、いま見られたように、トートロジーに帰着して答としての効力をもたず、その神観念も一義的な自明性と普遍性をもたないとすれば、少なくともそのような神のあり方を無条件的に信じることを決意するのではないかぎり、われわれはふたたび最初の問へと押し戻されることになり、エネルギーとキーネーシスとの区別の意味についての疑問は、依然、疑問のまま答えられずに残されていることになる。

一四 二種類の区別原理

エネルギーとキーネーシスとの区別を語るアリストテレスの言葉を最初に正面から受け取めたとき、われわれはそこに内包されるはずの重要な意味を積極的に認めることができた(本稿第四章、第五章)。しかしいま、アリストテレスとの問答を重ねた末、この区別が結局はあまり意味をもちえないのではないかという疑問が、解消されないまま残されることになってしまった(前章)。なぜこのような結果になったのか。いまや、この点を省みることを通じて、

アリストテレスにおけるこの問題についての総括を行なうための準備に取りかからなければならない。

当初の展望とは裏腹の目下の疑問はどこから起ったかという点、それは直接には、最もエネルギー的な活動でも事実上はキーネーシスへと類同化されると見られること、そしてこの点をめぐっての、実践(行為・製作)に対する観念の価値的な優位を表に立てたアリストテレスの説明に承服できなかったこと、に由来していた。

そこで、あらためてまず考えてみなければならないのは、なぜこのようにキーネーシスへの類同化だけが、一方的に問題とならなければならないか、という点である。一方的にと言うのは、その前に確認された「いかなる行為・行動も必ず、(a) エネルゲイアの面と、(b) キーネーシスの面との両面からなる」という二局面構造的把握にもとづくかぎりでは、もし(b)への類同化が問題とされるなら、(a)への類同化、すなわち、エネルゲイアへの類同化ということも、それと全く同等に考えられてよいはずだからである。

すなわち、われわれはこの二局面構造解釈が不可避であることを確認するにあたっての手續として、(1) キーネーシス型の例として挙げられるいかなる行動も必ず(b)の面とともに(a)のエネルゲイアの面を含む、(2) エネルゲイア型の例として挙げられるいかなる行為も必ず(a)の面とともに(b)のキーネーシスの面を含むという、この(1)と(2)の見解をアリストテレスがともに有していることを見届けてある(第二章)。問題となったキーネーシスへの類同化ということは、この(2)のほうの見解を示すアリストテレスの諸発言にもとづいて、「最もエネルゲイアのとみなされている活動でさえも必ず(a)の面とともに(b) キーネーシスの面を含み、そして事実上はキーネーシスのあり方において発動する」というかたちで導き出されたものである。それならばしかし、少なくとも事柄自体としては全く同等に、(1)のほうの見方に即して、「最もキーネーシスのとみなされている行動でさえも必ず(b)の面とともに(a) エネルゲイアの面を含み、そして事実上はエネルゲイアのあり方において発動する」という、逆の方向の類同化を表示する命題を立てることができるとは必ずしもである。そして、はじめに展望されたエネルゲ

イア概念の意義が生かされるためには、この命題の可能性を積極的に追求するほかはないことは明らかであろう。

この可能性に対して、アリストテレス自身の思考は、どのような反応を示すであろうか。キーネーシスの典型例であった「建築する」を、彼が場合によっては事実上エネルギーアとして扱っていることが先に見られた。じっさいまた、「建築する」にせよ「歩く」にせよ「学ぶ」にせよ、プシューケーにそなわる自然的能力の行使という観点を視座に据えてこれを見るならば、いずれもそれ自身がエネルギーアとみなされることが可能であろう。けれども、この可能性はアリストテレスにおいて、けっして全面的に追求され展開されることはなかった。全般的に見れば、明らかに彼は、これら「建築する」の類いを頭からキーネーシスとみなす見方を、つとめて固定させようとしているといわざるをえないし、そのことによって右の可能性をみずから閉じているのである。

なぜであろうか。それはほかでもない、まさに前章において表面化された観想と実践（行為・製作）との区別が、アリストテレスの思考のうちに最初からモチーフとして強く働いていること、そしてこの区別——それはまた何らの所産も伴わない活動と特定の所産（広義の）を伴う活動との区別でもあった——が、エネルギーアとキーネーシスとの区別の上に重ね合わされていることによる、と思われる。前者の区別によるかぎり、「建築する」という行為はいかにしても、特定の所産を伴うところの製作活動のほうに分類されるよりほかはないであろう。それゆえに——観想と実践（行為・製作）の区別＝エネルギーアとキーネーシスの区別という上述の重ね合わせによって——「建築すること」はキーネーシスである、と認定されているのである。

われわれの主要テクストの一つ、『ニコマコス倫理学』K巻四章（1174a19～28）における「建築」の扱い方は、暗黙のうちに行なわれるアリストテレスのこのような思考の動きを、よく示しているといえないだろうか。この箇所において、「神殿の建造」という建築活動を見る目は、はじめから「神殿」という〈所産〉のほうに固定されていて、「建築」とは、作業の開始からこの〈所産〉が出来上がるまでの過程の全体として規定されている。そして、その途

中のどの部分をとってみても、そのように規定された「建築」として不完全である（当然であろう、それは要するに部分は部分であって全体ではないということに尽きる）ということが、「すべてのキーネーシスは不完全である」ことの例証として語られているのである。

キーネーシス（物の動き）そのものをこのような仕方では、エネルギーと対比的に「不完全である」と記述することは、アリストテレスの立場として当然であり、正當でもある。しかし、「建築」という人間の行為が、いかなる意味においてもこのようなキーネーシスでしかありえないとまでは、これまでにも見られたように、本来は言えないはずである。にもかかわらず、ここでは（ここだけではないが）、「建築」があなたも自明であるかのようにキーネーシスとして扱われているのは、いま言ったように、観点がもつばら〈所産〉のほうに固定されていること、すなわち、「建築」が基本的には観想と実践（行為・製作）の区別の観点からとらえられ、その把握がそのまま、エネルギーとキーネーシスの区別の中へ平行移動させられていることによるのである。同じことは、「歩く」「学ぶ」「織る」など（いずれも広義の所産——到達地、学習成果、製品等——が伴う）についても言える。

そして同じことはまた、逆の意味において、エネルギーの例とされる「見る」「観想する」「思惟する」「生きる」「幸福である」等についても言えるであろう。すなわち、これらは特定の〈所産〉を伴わないがゆえに一律にエネルギーの例とされるのであって、例えばしかし「観想する」という種類の活動それ自体がつねに必ずエネルギーとしてみれば発現しないと、すでに見られたように、アリストテレス自身も主張することができないはずである。——これを要するに、アリストテレスがエネルギーとキーネーシスへの分類として語ったところの、これら行為・行動の種類分け——一方における「見る」「思惟する」等と、他方における「建築する」「歩く」等——は、本来は、特定の所産や成果を生じない観想型の活動と、特定の所産や成果が生じる実践（行為・製作）型の活動との区別を基準とした分類なのであって、照準ははじめからこの区別に合わされている。だからこそまた、エネルギーとキーネーシ

スとが原理的に区別されるとき、の観点から見れば、行為・行動の種類そのもののこのカテゴリーカルな分類は、崩れ去らざるをえないのである。

アリストテレスが重ね合わせた二つの区別原理は、こうして、もともと別種の区別原理であるといわなければならない。このことは、エネルギーとキネシスとの区別が元来は、真の行為とそうでないものとの区別であったのに〔形而上学〕θ巻六章〕、観想と行為・製作の区別においては、この同じ〔行為〕（プラクシス）が反対側の項に現われることから、端的にうかがわれるであろう。〔行為〕対〔真の行為でないもの〕〔観想〕対〔行為〕というこの等置は——かりにどれほど「行為」という語が異なった意味合いをもたされて使われているのだとしても——やはりどう見てもおかしいのである。

また、この二つの区別原理は「目的の内在外在か」という観点を共有するように見えるかもしれないが、これも外見上のことにすぎないであろう。なぜなら、例えば「建築」という活動がすでに述べたような意味でエネルギーとみなされる場合、「家」や「神殿」といった〔目的〕ないし〔所産〕は、家（神殿）を建てるための知の行使というかたちで、そのプシューケーの能力の行使活動自体の内に吸収もしくは内在化されているといわなければならないからである。『ニコマコス倫理学』K巻五章でアリストテレスが語っていた「欲びとともに建築活動に打ちこむ人々」の活動は、まさにそのようなあり方のものというべきであろう。それはけっして、活動そのものの外にある目的や所産に向かつての、たんなる〔動き〕ではない。

このような見方——あらゆる行為・行動におけるエネルギーの面の積極的な追求——の可能性は、しかし以上のように、もうひとつの異質の区別原理がその上にかぶせられることによって、一般的には徹いかくされてしまった。こうして皮肉なことには、かえって、最もエネルギー的であるはずの活動について、キネシスへの類同化とわれわれが呼んだ事態のほうが、一方的に表面に現われる結果となっているのである。そして、この点についてわれわ

れがアリストテレスの説明に承服できなかったのも、同じこの観想と実践（行為・製作）の区別を価値的な原理として立てることに対してであった。われわれが直面させられた疑問は、こうして、同じ一つの根から由来していたといえるであろう。

一五 最終章——総括と展望

前章の診断結果にもとづいて、われわれの到達した地歩からアリストテレスの思考を再構成し、本稿においてこれまでに出会った諸論点についてのコメントを加えながら、エネルギーとキネシスとの区別の意味を総括しよう。

(1) アリストテレスにおいて最初から最も強く働いているモチーフは、観想と広義の実践（行為・製作）との区別であり、後者に対して前者が価値的に優位にあるという見方であった。もともと、この区別とこの見方は彼にとって初期の『プロトレプティコス』以来、のっぴきならない重要な意味をもつものであった（本稿第一三章四一ページの注参照）。「第一哲学」を頂点とする彼の学問体系における、それぞれの対象領域や人間の知的機能の嚴重な区分（『形而上学』E巻一章、『ニコマコス倫理学』Z巻一章以下、など）も、この区別に対応するものであるし、またすでに見られたように、神の観念において表立って現われるのも、結局はこの区別にもとづく観想的活動の優位性と神性の思想であった（われわれはしかし、この考えに必ずしも承服できなかった）。

(2) 観想と実践（行為・製作）——前者からは当の活動自体と別に特定の所産が何も生じないが、後者からは特定の所産（広義の）が生じる——のこの区別は、『形而上学』θ巻六章その他で語られている(i)「見る」「思慮する」「思惟する」「生きる」「善く生きる」「幸福である」等と、(ii)「歩く」「建築する」「学ぶ」「健康になる」等と

のあいだのタイプの区別を、正確に指し示している。すなわち、この (i) と (ii) への分類は、本来は、観想と広義の実践 (行為・製作) との区別にもとづく分類であった。

(3) しかしアリストテレスはここで、おそらくはこの (i) のグループの行為 (観想型) と (ii) のグループの行為 (実践型) との区別を強化し、(ii) に対する (i) の価値的な優位を根拠づけるために、エネルギーアとキーネシスというもうひとつ別の区別原理を導入してこの分類と結びつけ、(i) のグループの行為 (見る) 「思惟する」その他) はそのまま一義的にエネルギーアであり、(ii) のグループの行為 (建築する) 「歩く」その他) はそのまま一義的にキーネシスであると主張した。

けれども、その際彼がエネルギーアとキーネシスのそれぞれに正当に帰したところの、両者のいくつかの原理的な特質を基準にして見るかぎり、この区別はけっして、行為の種類そのものの (i) と (ii) への区分と、一義的に対応しない。げんにまた、この一義的な対応の主張はアリストテレス自身においても、必ずしも一貫して厳格に保持されているとはいえなかった。われわれとしては、エネルギーアとキーネシスとの区別原理に従うかぎり、人間のいかなる行為も——(i) のグループのそれも (ii) のグループのそれも——エネルギーアの面とキーネシスの面との両面からなると解さなければならぬ、と判断した。

(4) ただし、アリストテレスがエネルギーアとキーネシスとの対比点として挙げた事柄のうち、「速い・遅いが言えない (エネルギーア) か、それとも言える (キーネシス) か」(いわゆる遅速テスト) という区別基準は、ほぼそのまま上記 (i) と (ii) への行為の分類と合致しているように見えるし (本稿第九章参照)、また同じことは (かなり問題はるが) ある程度まで、「現在が同時に完了でもある (エネルギーア) か、それともそうではない (キーネシス) か」という、いわゆるテンス・テストについても言えるように思われる。

すなわち、われわれの日常語法では、(i) のグループの行為を表わす動詞は、遅速テストに対してはマイナスの

反応を示し(例えば「月を速く(遅く) 見ている」「ある事柄について速く(遅く) 思惟にふけている」「速く(遅く) 生きている」「etc」とは自然に言えない)、テンス・テストに対しては大体においてプラスの反応を示す(「月を見つつある」||「月を見てしまっている」etc)。また逆に(ii)のほうの動詞は、遅速テストに対してはプラスの反応を示し(「速く(遅く) 家を建てつつある」「速く(遅く) 歩いている」etc)と自然に言える)、テンス・テストに対してはマイナスの反応を示すものが多い(「家を建てつつある」⊥「家を建ててしまっている」、「ギリシア語を学びつつある」⊥「ギリシア語を学んでしまっている」etc)。だからこうした区別基準は、(i)のグループの諸行為はエネルギーであり、(ii)のグループの諸行為はキーネーシスであるという主張を支持するように思えるであろう。

しかしながら、すで見られたように、(ii)のグループの行為、例えば「建築する(家を建てる)」という行為も、それがプシューケーの能力(家を建てる知)の行使であるかぎりにおいてはエネルギーなのであり、したがって、そのようなエネルギーとしての建築活動のあり方は、テンス・テストと遅速テストに対しても、本来は上記とは逆の反応を示すはずである。なぜなら、「家を建てる知というプシューケーの能力の行使」としての建築活動の〈形相〉は、その発動とともに完全に実現しているし、「速く」「遅く」ということは、この活動の本質にとって何の関わりもないからである。それがしかし、日常語法においては両テストに対して上記のような反応を示すのは、われわれの日常語法そのものの中に、「建築する」その他(ii)のグループの行為に対する、まさにそのような見方が組みこまれているからにほかならない。

すなわち、われわれの常識は(ii)のグループの行為については、これを純粹に自然的能力の行使と見るよりも、その所産・成果のほうを重要視する抜きがたい傾向をもっている。常識にとっては、何を建て、どこまで歩き、どれだけのことを学んだかが関心事であり、家を建てつつあること、歩きつつあること、学びつつあることよりも、建ててしまったこと、歩いてしまったこと、学んでしまったことが(また、論文を書きつつあることよりも書いてしまったこと

が!) 重要なのである。まさにそれゆえに、現在と完了とが引き離され、またその所産・成果が「速く」達成されたか「遅く」達成されたかが語られるのである。これは疑いもなく、われわれの常識とは、人間の生存と行動のための便宜性・有効性・効率性ということに合わされて形成されているからであろう。

日常語法の中には、常識のこのような見方が組みこまれていて、それゆえに、右のような意味での明確な所産・成果を有しない (i) のグループの行為を表示する動詞と、(ii) のグループの行為を表示する動詞とでは、先の両テストに対して互いに異なった反応を示さざるをえない。元をただせば生存と行動のための有効性ということから由来しているこのような語法上の事実を、アリストテレスは、(i) の観想型の行為は一律にエネルギーであり、(ii) の実践型の行為は一律にキネシスであるという主張のために援用したのである。しかしこの援用が効力をもちうるのは、くり返し言うように、あくまで日常語法の内においてだけであることを確認しなければならない。

(5) しかし、ただ援用しただけではない。アリストテレスは、日常語法の中に組みこまれている常識のこのような見方——(ii) のタイプの行為について所産や成果のほうに関心に向ける態度——をさらにその極端まで押し進めて、もはや常識的とはいえない一つの哲学的見解へと変形させたことになる。するわち、(ii) のタイプの諸行為はキネシス——もの(物)の動き——にほかならないがゆえに、その主体は行為する人ではなく、行為の所産や成果に向かって「動かされるもの(物)」のほうであるとする見解が、それである。すでに取り上げた(本稿第一章)『形而上学』θ巻八章におけるアリストテレスの言葉をふり返ってみよう。

「(能力の)行使自体のほかに、結果として何か別の所産が生じる場合は、その現実態は作られるものの内にある。例えば、建築することは建築されるものの内であり、織ることは織られるものの内であり、その他同様である。一般的に言って、動(キネシス)は動かされるものの内にある」(1050a30~34——「内にある」は主体のありかを示す)

「建築すること」や「織ること」(ii) のタイプに属する行為) について、ここで言われているように、能力の行使

そのものとしてこれを見るのではなく、その所産のほうに観点を向けるということとは、常識がとる見方でもあった。しかし、その同じ観点からさらに、「建築すること」や「織ること」がキーネーシス（もの（物）の動き）の一形態とみなされて、その主体が「建築されるもの」（家へと建てられつつあるもの）や「織られるもの」（織られつつあるもの）のほうにあると言われるとき（〈動〉の定義を説明した『自然学』I巻一章に見られるのと同じ見解である）、常識はこれとまどうである。常識は——「見ること」や「観想すること」の主体が「見る人」「観想する人」であるとアリストテレスがつづけて言うのと同じように——「建築すること」や「織ること」や「織ること」や一般に「作ること」の主体も、当然、「建築する人」であり、「織る人」であり、「作る人」であるとみなすだろうからである。

いづれにせよ、このアリストテレスの見解に従えば、ここで挙げられている〈製作〉（ポイエーシス）の事例だけでなく、彼がキーネーシスと呼ぶ（ii）のグループに属する諸行為のすべてについて——すなわち、「歩く」「学ぶ」などについても——、その主体は、所産（広義の）や成果に向かって何らかの意味で「動かされるもの（物）」のほうにあると考えるなければならない。

しかし、このように（ii）のグループの行為を、それが人間の行なう行為であるにもかかわらず、頭から〈物の動き〉と同一視することは、常識の見方から出発して到達した反常識的な見方であるだけでなく、事柄自体としても明らかに行き過ぎというべきであろう。そして、（ii）の種類の行為に対するこの過度の価値低減の措置は、前章で見たように、結果的にはかえって、（i）のタイプの活動の「キーネーシスへの類同化」という事態だけが一方的に表面に現われるというかたちで、価値を強化しようとした（i）の諸行為へとはね返ってくることになった、ともいえるのである。

（6）要するに、アリストテレスが提示したエネルギーとキーネーシスとの区別において、重要なのはこの区別への原理的な着眼そのものであり、その着眼点を生かすことである。それを妨げているのは、以上見られたように、

彼がこの区別の上に重ね合わせた観想と実践（行為・製作）というもうひとつの区別原理、およびそれにもとづく上記（i）と（ii）への行為の種類分けであった。したがって、この後者はアリストテレスにとつて抜き差しならぬ重要なモチーフであるとしても、われわれとしてはこれを、エネルギーとキネシスの区別から引き離さなければならぬ。

この引き離しは、彼の神概念の内容に大きくひびくけれども、しかし神が純粹のエネルギーであるという肝心の点は変らない。そして、それを範とする人間の生き方と行為のあり方については、蔽いかぶさっていた「(i)型の諸行為Ⅱエネルギー、(ii)型の諸行為Ⅲキネシス」という不当な種類分けが除去されることによって、本来の着眼点に内包されていた貴重な示唆が、積極的に生かされることになるであろう。すなわちそれは、人間のすべての行為は、これをプシューケーの自然的能力の行使としてみると、そして行為者自身がまさにそのようなあり方の行為と生をみずからのものとすることに徹するとき、エネルギーの原理的特質として挙げられた諸性格——目的内性、完全性、非時間性、現在がそのまま完了であること、など——を有することができるのではないか、という示唆である。それはまた、「永遠性ということを終りなき時間の持続としてではなく、非時間性として解するならば、現在のうちに生きる者がそが永遠に生きることになる」(Wenn man unter Ewigkeit nicht unendliche Zeitdauer, sondern Unzeitlichkeit versteht, dann lebt der ewig, der in der Gegenwart lebt.)^{*}と云うことでもある。「生の長さ」の縛めはそのとき消失するであろう。

人間におけるこのような〈現実活動態〉は、アリストテレスの言うごとく、知性（ヌクス）の活動に窮極するであろう。しかしその活動は、アリストテレスの言う意味での「観想」だけに局限されなければならない必然性はない。人間は、どのような行為・行動・製作にも、「心をこめる」ことができるはずである。

* L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-philosophicus*, 6.4311.

(7) しかしながら、保留条件は依然残存する。人間の主体的な生き方と行為のあり方における右のような可能性は、われわれはこれを疑いなく確言することができる。けれども、その前に確認された二局面構造的解釈によれば、神ならぬ身の人間の生と行為は（エネルゲイアの面とともに）不可避的にキーネーシス——物の動き——の面を伴わざるをえないとされていたのである。

この制約は結局、世界の一部としての人間にとつての制約であり、そしてそれはさらに詰るところ、アリストテレスの世界解釈の中に「運動の論理」（物があつて、その物が時間、空間の中で動く）とわれわれが呼んだところのものが、抜きがたく強力に根を張っていることから由来する制約にはかならないであろう。人間の行為について二局面構造的解釈が避けられなかったのは、プシューケーの能力行使としてのエネルゲイアが、世界を規制する「運動の論理」の制約下にあることからの必然的な帰結であると思われる。

プシューケーの能力行使としてのエネルゲイアということは、世界全体として見れば、人間だけに限られることではない。アリストテレスは『魂（プシューケー）論』（B巻一章～三章）において、プシューケーとその諸能力を、植物までを含めた有機体（*zōon zōon organon*）の全体にわたつてとらえている。獸が速駆け、鳥が鳴き、花が開き、葉が繁り……一寸の虫、一木一草にいたるまで、およそ生きとし生けるものの生命の営みは、すべてプシューケーの能力の発現であり、エネルゲイアなのである。知性（ヌウス＝思惟能力）の働きはその頂点にあり、これをもつ人間は先述のように、エネルゲイア性のほとんど極限を望みうると考えられた。しかし結局は、こうしたプシューケーを有する生物の世界は、プシューケーなき物体としての無生物界を含めた世界の全体ではなく、「可能的に生命をもつ自然的物体の第一の現実態」と定義されるプシューケーの諸能力の働きは、生命をもたない物体を合わせた世界を全体として規制する「物（物体）とその運動の論理」の制約の中にある、その頑強な抵抗に出会わざるをえないであろう。こうして、この点に関するアリストテレスの世界解釈上の立場は、「有機体においては、有機体のエンテレケイア

またはエネルギーとしてのプシュケーの働きによって、物(物体)とその運動の論理が部分的に緩和される」という見方に帰着することにならないだろうか。これは、ホワイトヘッドが「vitalism」と呼び、心・生命と、物・物質との二元のあいだの妥協として批判した考え方と、軌を一にする立場であるといえる。^{*}

* A. N. Whitehead, *Science and the Modern World*, Cambridge U. P. (repr. 1953), pp. 98, 128.

(8) もし事情がかくのごとくであるならば、われわれは先にアリストテレスの行為論において、上述の(ii)の類型の諸行為を頭からキーネーシスとみなすことの不当性を指摘したけれども、問題はこのキーネーシスそのものとのらえ方——「運動の論理」的なのらえ方——にあるといわなければならない。アリストテレスのエネルギー・モチーフが最初われわれの期待したような仕方では、世界解釈全般の内にも充分に生かされるのを見るためには、彼のキーネーシスのとらえ方を徹底的に洗い直してみなければならぬであろう。これは本稿に許された範囲を超える仕事である。しかし、若干の基本的な事柄だけは最後に見ておきたい。

「運動の論理」とは、何よりもまず、キーネーシス(動、運動)の主体となる運動体(εὐκίνητος/κίνητος)の確在の論理である。^{*}これはアリストテレスにおいて、キーネーシスとは実体に依存してある属性ないし様態のようなものであって、実体なしにはありえないという、彼の基本的な立場から要請される考えである。^{**}そして、自然におけるキーネーシスにとって、不可欠の主体となるこの運動体は、「物」「物体」でなければならぬ。われわれはすでに、この見方が成立する事情の一端を見た(本稿第二章)。そこで一つの重要なポイントになっていたのは、『自然学』Z巻四章その他において見られたように、アリストテレスがキーネーシスを含めた変化(メタボレー)の分析によって、「変化するもの」はすべて必ず「分割可能なもの」(すなわち、一定の大きさをもつもの)でなければならぬと考えたことである。^{***}

認めたといえる。それは例えば『国家』第五巻末に見られるような、感覚と思わくの世界の事物についての、「どちらであるとも、どちらでもないとも、固定的に考える (επιχειρῶσθε μὴ οὐκ εἶναι)」¹ こととはできない」という認定と確実につながっている。

これに対してアリストテレスは、すでに見られたように、同じく変化の現場において考えられる「AでもなければB (非A) でもない」という非合理的あり方を、非合理的ながゆえに「不可能」として斥け、代りに、「へ変化するもの」の一部分はAであり、一部はB (非A) であることが必然²であると考えることによって、へ変化するものへはすべて必ず部分へと分けられうるようなもの (一定の大きさをもったもの) でなければならぬという、まったく違った結論へと導かれたのである。これによって、物 (物体) としての〈運動体〉・〈変化体〉の確在の要請が絶対必然となることは明らかであろう。それはアリストテレスがプラトンと違って、感覚界における変化に内包される矛盾・非合理性をそのまま認めることを欲せず、これを右のような説明 (ἡ ἀπορία διαφανῆς) によって回避しようとしたことによる。³

* この点についてはなお『形而上学』Γ巻五章 1010a16~22 参照。

動や変化をこのように、物の動き・変化としてとらえることは、常識にとつてはほとんど不可避の見方である。そうしなければわれわれは、生存や行動のために事態に対処するのしぼれないからである。科学もまた、この想定の上に立って世界を見ることによって有効に進められてきた。ただしかし、これが動や変化の、そして動と変化が支配するこの世界の、窮極的なあり方であるかどうかは、また別の問題である。げんに、いま見られたプラトンの変化の分析と感覚界のとらえ方からは、物としての運動体の窮極的な实在を前提とするこのような見方は、必ずしも帰結しないし、世界解釈全般の図柄も、おのずから違ってくるであろう。それはしかし、アリストテレスにとっては、少なくとも動と変化の分析の場面では、必然的に要請される見方であった。そして先に、ある種の類型の諸行為をキーネ

ーシス（物の動き）と同一視する、彼のそれ自体としては反常識的な見解が、元をただせばしかし、所産や成果に關心を向ける常識の見方に根をもっているのが見られたが、このキーネーシスそのもののとらえ方もまた、変化のパラドクス（反常識）を本能的に回避しようとする、生存と行動の有効性に合わされた常識のうちに根をもっているといえないだろうか。

しかし、アリストテレスにおいて「運動の論理」がこのように、常識に根ざしつつ強力であればあるほど、はじめに述べたように、それに鋭く対置されたエネルギー概念のもつ意味は貴重であるといえるのである。ただ、これがすべて以上のような制約を突破するのを見るためには、われわれは彼のキーネーシスの定義——「建築」その他を例に用いるその不当な例証を取り去り、またこの定義から導き出された必ずしも正当と思えない諸見解を取り去ったとすに残る、キーネーシスをほかならぬエネルギー（エンテレケイア）として規定する定義そのもの——に再度目を据えることから、出発し直さなければならぬであろう。

（完）

（筆者 京都大学文学部〔西洋哲学史〕教授）

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

Aristotle's Distinction between *Energeia* and *Kinesis*

by Norio Fujisawa

Although the points that Aristotle is trying to bring out with his distinction between *energeia* (actuality) and *kinesis* (motion) (in *Metaphysica* 6, *Ethica Nicomachea* K3-4, et al.) are of continuing philosophical interest, it is by no means easy, as is generally recognized, to understand precisely what distinction he has in mind.

Investigating carefully the relevant passages in Aristotle's works and reviewing critically arguments submitted on the problem by G. Ryle, J. L. Ackrill and T. Penner, this paper tries to give a clear and consistent interpretation of what Aristotle says about *energeia* and *kinesis*, and diagnoses those difficulties which we encounter in interpreting it as largely due to the fact that Aristotle is inseparably connecting this distinction with his another favourite distinction between *theoria* and *praxis* (in wider sense, including *poiesis*), the latter distinction being similar to, but in its very nature quite different from, the distinction between *energeia* and *kinesis*.

According to this diagnosis, the present writer holds that, by removing from it the covering of the heterogeneous *theoria-praxis* distinction, we can focus much light upon the real philosophical significance of Aristotle's conception of *energeia* as opposed to *kinesis* — a conception which should be regarded as agreeing in some important aspects with the motive in Plato's theory of Forms. It is argued, however, that, in the final analysis, Aristotle's own general theory of the physical world further imposes a serious restriction on the fully developing this important conception.